足立区男女共同参画推進委員会会議概要

会 議 名	令和6年度 第5回 足立区男女共同参画推進委員会		
事 務 局	地域のちから推進部多様性社会推進課		
開催年月日	令和7年1月27日（月）		
開催時間	午後2時01分 ～ 午後4時14分		
開催場所	L. ソフィア 3階 第2学習室		
出席者	【委員】		
	石坂 督規 委員長	内藤 忍 副委員長	ぬかが和子 委員
	水野あゆみ 委員	杉本 ゆう 委員	國府田 豊 委員
	新木 香 委員	片野 和恵 委員	齋藤ゆきえ 委員
	遠藤美代子 委員	秋山 知子 委員	佐藤 英二 委員
	田口 麻美 委員		
	【ヒアリング担当】		
	NPO法人カタリバ アダチベース事業責任者		
	NPO法人キッズドア 執行役員	NPO法人キッズドア 事業担当	
	小室 足立福祉事務所長		
	廣瀬 生活支援推進課子どもの学習・生活支援係長		
	【事務局】		
	依田 地域のちから推進部長	小木曾 多様性社会推進課長	
	木野瀬 事業調整担当係長	岡 男女共同参画推進係長	
	柏村 男女共同参画推進係主査		
【傍聴者】 2名			

<p>会 議 次 第</p>	<p>1 開会挨拶</p> <p>2 「不登校児童・生徒に対する居場所支援事業」および「居場所を兼ねた学習支援」ヒアリングについて</p> <p>3 令和6年度最終提言案について 施策1-1 「困難を抱える世帯等が安心して生活できる環境づくり」</p> <p>4 事務連絡</p>
<p>資 料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料1-1：令和6年度第4回男女共同参画推進委員会（11/27）の要点 ・資料1-2：令和5年度男女共同参画施策成果指標の実績報告【修正版】 ・資料2：第5回男女共同参画推進委員会 出席者一覧 ・資料3：事業概要「不登校児童・生徒に対する居場所支援事業」 ・資料4：事業概要「居場所を兼ねた学習支援」 ・資料5：ヒアリング代表質問一覧 ・参考資料：多様性社会推進課所管各講座チラシ
<p>そ の 他</p>	

様式第2号（第3条関係）

（審議経過）

1 開会挨拶

（小木曾課長）

皆さん、こんにちは。

定刻になりましたので、令和6年度第5回足立区男女共同参画推進委員会を開催いたしたいと思っております。

私、事務局を務めさせていただきます、多様性社会推進課長の小木曾です。

本日は、ヒアリングにご参加いただくためにゲストもご参加いただいております。後ほどご紹介をさせていただきます。

早速ですが、足立区男女共同参画推進委員会規則の第4条に基づき、本委員会は総委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができないとなっております。

本日、現在12名の方が出席していただいております。あと、國府田委員から遅れるというご報告は受けていますが、ちょっと何時頃になるかというのは定かではない状態でございます。

また、今回、オンライン参加の希望者はございませんでした。

続いて、会議の公開についてです。同規則の第5条により、当委員会は公開することとなっております。

あわせて、会議録の作成が必要となっております。委員の皆様のご発言につきましては、後ほど内容を確認いただいた上で、公開する形となります。

議事録作成のため、マイクを通して録音しておりますので、恐れ入りますが、発言の前にお名前をおっしゃっていただくと助かります。

また、本日は傍聴人の方もお見えになっておりますので、ご承知おきください。

では、次第に沿って進めてまいりたいと思っております。

まず、開会のご挨拶を石阪委員長よりお願いしたいと思います。

（石阪委員長）

着座にて失礼させていただきます。

委員長の石阪です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

先ほども課長からお話がありましたとおり、本日はゲストの方にお越しいただいて、皆さんがこれまで非常に関心の高かった不登校児童や生徒に対する居場所支援事業並びに居場所を兼ねた学習支援事業、この2つの事業についてヒアリングを行わせていただくと。本日は、担当所管の方並びに実際に活動されている団体の方にお越しいただいて、お話を伺いたいと思っております。

お時間の都合で、皆さんから一人一人から質問させていただく時間があるかどうかちょっと分かりませんが、前回調整させていただいたとおり、私のほうから代表質問という形でまずさせていただきます。その後、時間があれば皆さんから質問を受けたいと思っております。

時間が非常にタイトですので、何とかスムーズに進められるよう、皆さん、ぜひご協力をお願いして、大体前半の1時間ぐらいで質問時間は終わりということになります。後半については、それを踏まえて皆さんと一緒に議論していきたいと思っております。

今日、ゲストの方、どうぞよろしく願いいたします。

私からは以上になります。

（小木曾課長）

ありがとうございました。

続いて、資料の確認をさせていただきます。

まずは次第がございます。

次に、資料1-1、前回の委員会の要点

になっていますので、お目通しいただければと思います。

次に、資料の1-2、こちらは前回資料の修正版でございます。

修正箇所は、5ページのところ、施策13のNo.3、短期的な成果指標に占める目標達成率、前回「30%以上」というふうな記載でしたが、正しくは「30%以下」という指標の割合になって、数値のほうも「0%」というふうに修正いたします。

また、3ページのほうに、施策8-3で、前回、区の助成で資格を取得した女性の防災士数、この人数は延べ人数かどうかというご質問がありました。後ほど所管課のほうに確認させていただきまして、こちらは延べ人数ということで確認が取れましたので、ご報告させていただきます。

では、資料の確認に移ります。

次に、資料の2は、今回の推進委員会の名簿と出席者の一覧、席次となっております。

次に、資料の3です。今回来ていただいている団体さんの不登校児童・生徒に対する居場所支援事業の資料の事業概要資料となっております。

資料4が、同じく居場所を兼ねた学習支援の事業概要の資料となっております。

最後の資料5、前回からの意見を踏まえまして、代表的な質問の一覧となっております。

また、最後のほうに講座のチラシ等を3枚ご用意させていただいております。

資料の不足等はございませんでしょうか。

2 「不登校児童・生徒に対する居場所支援事業」および「居場所を兼ねた学習支援」ヒアリングについて

(小木曾課長)

では、早速、ゲストの方に来ていただいているので、ヒアリングのほうに入らせていただきたいと思います。

ヒアリングに先立ちまして、まず、本日も出席いただきました方々の紹介をさせていただきます。

窓側のお席のほうから紹介させていただきます。

最初に、委託を受けて不登校児童・生徒に対する居場所支援事業、居場所を兼ねた学習支援を実施しております、NPOカタリバ、アダチベース事業責任者様です。よろしく願いいたします。

(NPO法人カタリバ)

よろしく願いいたします。

(小木曾課長)

続きまして、NPOキッズドア、第1事業部ご担当者様。

(NPO法人キッズドア)

よろしく願いいたします。

(小木曾課長)

同じく第1事業部執行役員様。

(NPO法人キッズドア)

よろしく願いいたします。

(小木曾課長)

続いて、居場所を兼ねた学習支援のほうの所管課のほうになります、足立福祉事務所の小室所長になります。

(小室所長)

小室です。よろしく願いいたします。

(小木曾課長)

担当の方になります、生活支援推進課の子ども学習・生活支援係の廣瀬係長になります。

(廣瀬係長)

廣瀬です。よろしく願いいたします。

(小木曾課長)

なお、不登校児童・生徒に対する居場所

たちの数が多いために、ある程度支援メニューを増やしたりですとか、オンラインでの支援というのも今カタリバは実施をしているんですけども、そちらも含めてもうちょっと重層的にやっていかないとリーチができない、つながれない子たちがいるというのが、足立区だけではなくて、全国的な課題だと考えております。

実際に何をやっているかというのが5ページ目以降に書かせていただいているんですけども、まずは居場所と、世の中で言うフリースクールに近い支援をやっておりまして、通常、有料なことがフリースクールの場合は多いんですけども、こちらは足立区の委託事業ということで無料で利用ができて、対象者とか開館時間についてはそちらに書いてあるとおりでありますが、イメージとしては、学校と同じような時間帯で、学校生活で送れる取組とか経験というのをある程度代替できるというのを目標にして、週に4日間開館するという形で行っております。

めくっていただいて、7ページ目から8ページ目なんですけれども、目標としているところは、学校の勉強に追いつくことは難しく、目指しているのは、社会参画ができたとか、社会的な自立が一定程度できるという素地を、ベースラインを育てるということを考えております。

本来、学校に行けば、例えば運動会に出たりとか、職場体験に行ったりですとか、何かしらの共同体験というのをやると思うんですけども、それがもうほとんどない状態になっているので、そういったものを、まずは家から出て居場所に来てもらい、体験支援とか食事支援、あとは学習の一部、特に受験生なんかもありますので、そういった支援を通して経験してもらおうというの

をやっております。

最後、9、10、あと11ページ目ですね。幾つか具体的な実施内容をご説明しているんですけども、居場所に来ることができるようになって、定着ができれば、そのペースはかなり、半年程度やっぱりかかったりすることが多いんですけども、そこまでいけたら、生徒三、四人とか、それぐらいの人数でスタッフと一緒に外出をしたり、食事をメニューを考えて作ってみたりとか、地域の方とかちょっと知らない人がいる状態でもそういうイベントが行えるというふうなことを目指しながら、体験支援や食事支援、あとは学習支援というものを行って、最終的に、13ページ、卒業生の進路が載っていますが、不登校の子どもたちに合わせて学び直しができたりとか、通いやすいような選択肢というのを、学校が進路指導の主体ではあるので、学校と連携しながら、我々ができる範囲の作文指導や面接指導などを行って、中学校を卒業し、高校が無事に決まれば、我々の事業からは卒業になるというふうな流れが一連の実施をしている内容でございます。

それ以降は、一部オンラインのことだったりとか、別の事業の話も入っておりますので、補足資料として、お時間があればお目通しいただければと思います。

以上になります。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

これは主に昼間やっている、不登校のための子どもたちのための支援事業ということになります。こんなスケジュールでやっていただいていると。

また後ほど質問させていただきたいと思っております。

それでは続きまして、キッズドアさんよ

ろしくお願いいたします。

(NPO法人キッズドア)

よろしくお願いいたします。

私のほうから放課後の居場所を兼ねた学習支援事業を中心にお話しさせていただこうと思います。

まず、資料の2ページ目というふうの下に薄く書いてあるところから説明させていただきます。

団体の概要については、先ほど石阪委員長からもお話があったとおり、CMがたくさん流れていて、皆さんご存じかなというふうにも思うんですけども、主にどういったことをやっているかというところの説明をさせていただきます。

全ての子どもが夢や希望を持てる社会を実現すると、そういったことを目標にしているNPO法人になります。

主にやらせていただいているのが、スライドの右側のほうにある学習支援、居場所支援、体験活動、家庭支援、調査研究、あとアドボガシー活動というふうに、現場だけをやるというわけではなく、現場で見えてきた課題をアドボガシーなどで政策提言して、そこから社会を変えていくというところで、全ての子どもたちにリーチができるようにということをやらせていただいております。

では、2ページ目になります。

裏面にありますのが私たちが受託している事業になりますが、居場所を兼ねた学習支援事業、キッズリビングという名称をつけております。

対象としては区内在住と書いてあるんですけども、開催が火曜日から日曜日。主に平日は15時から20時までを開館時間とさせていただきます。カタリバさんの場合は少し開館時間が違う部分もあります。

あと、支援内容としては、学習支援、あと居場所支援、食事支援、体験活動、そして家庭支援という形でやらせていただいております。

では事業はどのように形をつくっているのかというところの説明をさせていただきます。

私たちが目標にしているのは、先ほどカタリバさんからもあったとおり、「社会的自立」という言葉があったと思いますが、私たちのほうでは、その自立というところ、いわゆる社会参画していくこともそうですし、精神的にも、経済的にも、社会的にも、そして生活的にも自立をしていって、世の中で活躍ができたり、自分がなりたい姿になっていける力をつけていく、そういったことを目標に多様な支援を展開しています。

この学習支援も、定期テストの対策であったり受験対策というのはもちろんのこと、やはり勉強をやりたくない、何でやる必要があるんだというところから始まるお子さんもいます。なので、そういったときには、無理やり進めるのではなく、学習する意図、目的を本人の中に芽生えさせなければいけないということで、体験活動であったりをしております。

その体験活動も、自然体験であったり、職場、職に関する体験であったり、職場体験、そしてそのほかにも様々、企業の社長にインタビューをしてみるとか、そこでロールモデルを新たに見つけていくと。そのことが学習する意欲だったりモチベーションを上げることにもつながる。

その逆のパターンもあります。学習はすごいやっているけれども、自分で将来、結局、何になれるんだろうというふうに目標が定まらないというお子さんもいます。なので、そういったときには、体験活動を通

して、もしかしたら、自分は、こんなふうになってみたいと将来の展望を描けるようにということもやっております。

そして、この居場所支援というところも、ここは大変本事業の大きな肝になる部分だと私たちは思っております。どうしても、安心できる場所がなければ、そこに毎回行き続けることもできない。毎回行き続けることができる場所になることを大前提にしています。そうすることで様々な支援を受けられる形になるわけですが、ここで、必ずしも居場所は、安心できれば、ただそれだけでいいという場所でもないかなというふうに考えています。

この自立という観点で居場所づくりをやらせてはいただいているんですけども、他者と、子どもたち同士がこの場所でどういったように過ごせるといいかということを決め、それを実際の居場所の運営に充てていく、居場所コーディネーターというものを子どもたちの新たな役割として与えています。そういったことを通して、子どもたちが自立に向かっていけるように多様な支援をやらせていただいています。

実際の利用者の状況ですが、キッズリビング、弊会は2か所やっておりますので、それぞれの箇所です。定員それぞれ90名ずつ、現状180名程度となっております。

では、私からの説明は以上となります。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

主に今、居場所を兼ねた学習支援事業の説明をいただきました。

実は、今回、実際に2団体に来ていただいていますけれども、今、足立区には4つ、こういった施設がありますけれども、2つ、2つという形で分担いただいて、それぞれ東西南北にあるんですかね、足立区は。こ

れは、担当課の方、どうでしょうか。4つあるわけですね。

(小室所長)

正確に言いますと、4つの拠点と2つ分室があります。西部と東部は分室がそれぞれあります。分室のほうは高校生、拠点については中学生、高校生が利用しています。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

2団体とも昼間に不登校のための支援をして、それから夕方から夜にかけて学習支援のほうをされていると、こういうことになっています。だから、立てつけとしては、昼間から夜と、そこで支援する人が替わるわけですね。こういった建て付けになっているということになります。

それでは、ここからは私から代表質問という形で資料5に沿ってお話をさせていただきます。

まず、こちら、なぜ今日、こういった団体にお越しいただいてお話を伺うかということですが、足立区の第8次の行動計画の中に施策の11というところがあります。

「困難を抱える世帯等が安心して生活できる環境づくり」、こういった項目があります。困難を抱えた世帯の特に子どもたちが健康に育っていける環境をつくらうという目標がある。

実は、これは数値目標も設定されているんですが、学習支援に通う生徒のアンケートで、大人になったときの夢や目標があると回答した割合、これは、資料でいうと、資料の1-2のところを開いていただくと、施策の11とあるんですが、それを見ると、計画時には74.1%が目標があると答えたんですが、令和5年度はそれを下回ってしまって、69.3%。数値目標を最終的には79%まで持っていくということで、一旦下がっ

ているという状況があります。

実際に、本当に子どもたちがこういった夢や目的、目標を持ちながらそこで過ごしているのかどうか、実態をまず把握することによって、これからの政策提言に生かしてもらおうということで、我々のほうで本日はお越しいただくよう事務局に要請をした次第です。

質問ですけれども、1から10まで資料5のほうに書かせていただきました。これは皆さんと、あるいは事務局、私も含めて精査をして、この10個になったんですが、1番から伺ってまいりたいと思います。

先ほども少しお話がありました、実際に利用されている方の家庭の状況ですね。どんな方々が多いのか。我々はあくまで貧困世帯だろうという認識でいるわけですが、例えば昼間の事業、これは不登校の場合は比較的貧困家庭が少なく、むしろ夕方以降の居場所のほうに比較的貧困が多いとか、恐らくあると思うんですが、これは実際に所得であったりとか家庭の状況で、これはどうでしょう。分かるところで構いません。

では、まずはキッズドアさんのほうから。

(NPO法人キッズドア)

私のほうから、足立区から委託を受けているのは西部と東部になるんですけれども、私のほうが基本的に西部を見ておりますので、西部のことになりますが、午前中の不登校支援と午後の居場所を兼ねた学習支援、両方お話しさせていただくと、まず不登校支援のほうで、総数20名定員になっていて、現在、満員になっているんですけれども、ひとり親家庭は半数以上、11名ほどひとり親家庭がいる状況になっています。

事前質問にいただいているようなDV被害者というところは、事前情報としてある

子はいないんですけれども、またあと世帯年収というところも事前には把握しておりませんので、そちらは不明になりますが、基本的に、家庭の親御さんの構成であったり多子世帯が多いというところから、基本的には入ってくる段階でそういった収入要件というものは不登校支援はないんですけれども、家庭的には困窮している、困っているんじゃないかなというようなご家庭が多いと感じています。

居場所を兼ねた学習支援のほうは、ひとり親家庭は半数以上おまして、こちらもDV被害者について積極的に把握しているわけではありませんが、事前情報としては2世帯くらいあるというところ。

また、世帯年収については詳しくこちらでは把握しておりませんが、その他手当も70名以上受けているという状況になっております。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

②のほうにいきますけれども、学年は大体分かりますか。

(NPO法人キッズドア)

学年も把握しておりまして、不登校支援のほうからですと、現在、今年度、現時点で参加してくれている不登校支援の生徒、小学校5年生から入ってくるができる事業になりますので、5年生が今年度、今いなくて、小学校6年生が今4名、あと中学校1年生が2名、2年生が8名、中学3年生が6名という状況になっております。

居場所を兼ねた支援事業につきましては中学生から入ってくるができますので、中学1年生が12名、2年生が28名、3年生が23名。その後、中学校時代に利用していた高校生世代の子たちが継続して利用する場合もありますので、高校生が総勢で今32

名いるという形になっております。

あとは、進路が決まらず、未定の生徒が3人いらっしゃいます。

(石阪委員長)

これは、今のお話ですと、中学校までなんだけれども、高校生もこの放課後のほうには入ってくる。

(NPO法人キッズドア)

放課後のほうは、中学校世代で利用していた生徒が、そのまま継続して高校生世代も利用することができるので、利用しております。

(石阪委員長)

ということですから、これはだから定員には入っていない。定員プラスアルファ。

(小室所長)

高校生も定員はあります。

(石阪委員長)

定員はある。分かりました。

広い意味でいうと、高校生まで入ってきて支援をしていると、そういうイメージでよろしいですかね。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

それでは、カタリバさんのほうに伺ってみたいと思いますが、補足で構いませんけれども、同じような形ですかね。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。おおむね今お伝えいただいたような構成、世帯状況というのは変わらないかなと思ひまして、我々のほうも、まず不登校支援のほうは、正式な、我々のほうできっちり取っている世帯状況とかひとり親家庭のデータはお出しはできていないんですけれども、体感でひとり親世帯か、ご両親がいらっしゃるご家庭かというところ

ろで言うと、大体半々ぐらいの割合かなというふうに考えていまして、一応、全国的な厚労省とか労働政策研究・研修機構が出しているデータだと、世帯収入とかひとり親家庭と不登校出現率のデータが出ていますが、約2倍から3倍ぐらい、ご両親がいらっしゃる家庭より、ひとり親家庭の子のほうの不登校になりやすいというのが出ていますので、足立区さんにおいてもそういう傾向はあるのかなと思っています。

困窮世帯向けの事業でいうと、居場所を兼ねた学習支援の事業でいうと、ひとり親家庭がカタリバのほうは6割から7割ぐらいいらっしゃって、就学援助を受給されている方も85%ぐらいなので、かなり大部分、そういう経済的には厳しいご家庭が多いと思います。

参加されている児童・生徒さんの割合だと、カタリバのほうは小学生が今現在いなくて、これも年によって大分変わるんですけども、今は中学3年生が25%くらいで、中2が多めで45%くらいで、中1が30%くらいというふうになっておりまして、中学校1年生の途中から中学2年生にかけて入ってくる子が結構多くて、最初のほうは恐らく区にある支援メニューの中で、チャレンジ学級とか、今、足立区さんのほうで別室の支援も始めているので、そういったところに、学校になるべく通ってほしいと親御さんも思っていると思うので、まずは学校に近いところからトライをいろいろされていて、それでも厳しいとなってきたときに、それが中1の終わりとか中学2年生になってからこの事業のほうにご相談に来るといったケースが多いと思っています。

(石阪委員長)

引き続きお話を伺いたいんですけども、

そうすると、入ってくるきっかけということになると、主に学校、もしくは区役所、どういうルートで入ってこられるのか。直接、多分、電話というのはさすがにないと思うんですけども、親御さんから。分かりますか、ルートですけども。

(NPO法人カタリバ)

やはり教育支援センターさん経由が一番不登校のほうは多くて……

(石阪委員長)

教育支援センターというのは、これは区になるのかな。

(NPO法人カタリバ)

そうです。区ですね、建て付けとしては。教育相談課というところで、お子さんが不登校傾向になり始めたりとか、何か養育上のお困り事があったときに相談される窓口というのが、学校外だと基本的にそちらになっているので、まずは、うちの子が学校に行き渋っているんだけどもとか、なかなか学校の先生に直接言いづらいこと、例えば先生と合わなくて難しいとか、そういったことは基本的にそちらにご相談されているケースが多くて、そうすると、その支援センターの中でやっている、いろんな学校の学校へ行けていない子が来るチャレンジ教室というものに行くか、もう少しライトな、学習色が少し薄くて、まずは居場所的なサポートが必要そうという場合は、こちらの不登校児童・生徒向けの居場所事業が紹介されて、では見学に来ませんかという流れになっているケースが多いと思います。

一部、口コミですとか、そういうオフィシャルではない、つながりだったり、豆の木メールみたいなひとり親家庭のツールもあるので、そういった公的なもの以外のもも含めて、情報を得られて問合せを区の

ほうにされているという方もいらっしゃいます。

(石阪委員長)

ありがとうございました。

これはキッズドアさんのほうもそうですか。どうでしょう。どんなルートで入ってくるかということですが。

(NPO法人キッズドア)

おおむね同じにはなりまして、やはりスクールソーシャルワーカーですとか教育相談員からの紹介だったり、あとは学校のカウンセラー、あとは担任の先生からのご紹介ということで入ってくるパターンもありますし

(石阪委員長)

つまり、学校経由で入ってくるパターンと、区のほうを通して入ってくるパターン、この2パターンがあるということですね。

(NPO法人キッズドア)

あとは、居場所を兼ねた学習支援のほうですと、事業案内のチラシを各中学校に配布させていただいているので、そちらで見ってお問合せいただく方だったり

(石阪委員長)

直接、親御さんからということ。

(NPO法人キッズドア)

直接、区のほうに。

(石阪委員長)

区のほう。分かりました。

(NPO法人キッズドア)

お問合せをしていただいて、こちらに来ていただいたり、あとは地域団体と連携をしてフードパントリーなどを行っておりますので、そういったところから聞いて来てくださったり、口コミで入ってきてくださる。

あとは、兄弟姉妹が利用していて、そのままきょうだい利用ということもとても多

いかなと思います。

(石阪委員長)

これは区のほうに確認ですけれども、基本的には今のルートなんでしょうか。いわゆる区ルート、学校ルートとあると思うんですが。

(廣瀬係長)

生活困窮のほうでいいますと、主に一番多い、令和5年度でいいますと、104人が新規でつながった生徒さんの数になります。そのうちの約4割が、学校から配られたチラシを見て、保護者の方からご連絡をいただいでつながったという例が一番多くなっております。

あとは、スクールソーシャルワーカー、ケースワーカー、中学校の先生経由というところになりまして、チラシを合わせて関係機関からつながったという数が約半数になっております。

あと多いのが、ご兄弟が以前この事業を使っていたので、下の子ども使わせてほしいというような例が104件中18件ありました。

あとは、知り合い、お友達から聞いて知ったという方が、同じ数、18件というのが生活困窮のほうのつながりということです。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

それで、今のルートの話は分かったんですけども、実際にこちらに入って、さっき伺おうと思ったんですが、どれぐらいみんないらっしゃるのか。例えば、卒業と同時にやめていくものなのか、それとも、例えば、すぐ、3か月とか、平均どれぐらいいらっしゃるのかというのを聞きたいんですが、キッズドアさん、どうですか。利用期間という。

(NPO法人キッズドア)

先に不登校支援のほうでいいますと、継

続年数、今年度は、定員が20名、夏休みあたりにもう定員いっぱいになってしまうんですけども、現時点で、継続を停止した生徒というのが2名おまして、体調面とか精神面が少し安定せずに、外出も困難だなどということと継続を希望しなかった生徒と、あとは、チャレンジ学級のほうに利用が繋がったため、継続利用しないということで停止した生徒が2名おりました。

過去年度におきまして、途中利用停止となる生徒は各年度2名程度いるというところで、継続年数でいいますと、現時点いる20名、令和3年度から続けて来てくれている子が1名おまして、その子は小学校5年生から入ってきて、今、中学2年生という形で、また来年もきっと継続してくれるだろうなという生徒が1名おまして、ほかにも令和4年度から4名続けておまして、5年度から7名。今年度入ってきてくれた生徒が8名いるような形になっていきます。

居場所を兼ねた支援事業に関しましても、継続利用を停止した生徒というのは2名おまして

(石阪委員長)

理由は分かりますか。

(NPO法人キッズドア)

継続利用を停止した理由というのは、すみませんが。

(NPO法人キッズドア)

補足させていただくと、部活動が大変厳しくなってきたりして参加するのが厳しいという方であったり、あとは区外に転居されるというケースですね。

あとは、これは後でも説明させていただくと思うんですけども、保護者の方のニーズと生徒ご本人のニーズが異なっていて、そこに挟まれてしまったお子さんが

結構精神的にも厳しくなってしまうというようなケースで継続に至らないという場合があります。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

それでは、カタリバさんのほうにも伺いたいんですが、聞きたいのは、どれぐらいいらっしゃって、やめる理由、継続できない理由を伺いたいんですが、いかがでしょうか。

(NPO法人カタリバ)

主に不登校の事業のほうをお話しさせていただくと、先ほどお伝えしたとおりで、中1、中2、中1の終わりぐらいから中学2年生にかけて入ってくるケースが多くて、平均の継続年数は取れてはいないんですけれども、大体1年半から2年弱ぐらいの間に収まっていると思います。

やめてしまうケースというところかというと、少し生々しい話というか、生徒同士の話になってくるのでなかなか難しところですが、利用者同士で例えば恋愛が、あの子を好きになってというのなどもあったりします。結構人間関係での。

(石阪委員長)

人間関係上のトラブルですね。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。うまくいかなかった経験とか、いった経験の絶対量自体が結構少ないお子さんが多いので、利用者同士が仲よくなったときに、それがうまくいっているうちはすごく利用が活発になったりするんですけども、それがうまくいかなかったときに、どちらかが来られなくなるというケースが中では実際に見られます。

あとは、先ほどもお話があったとおりなんですけれども、学校にちょっとチャレンジをしてみたりとか、ここの居場所以外の

部分にトライをしてみるということがあって、その後、それがうまくいなくて、戻ってくるというのはなかなか難しく、ここがコミュニティーになるように我々は運営している部分があるので、もちろん学校復帰は望ましいので後押ししたいのですが、せっかくチャレンジしたのに、またあいつ戻ってきたぞというのが気になってしまうお子さんが多くて、そういった理由で、ほかにチャレンジしてみて戻れなくなって、ここが使えないのは、我々の努力不足の部分も多分あると思うんですけれども、実際には発生していると思います。

(石阪委員長)

例えば、懸念としては、スタッフとのトラブルであったりとか、その利用者ですね。あるいは親御さんの意向に沿わなかったとか、そういう事例というのはあるんですか。あまり、本人同士のケースが多いんですかね。本人の問題でやめていくケースが多いのか。

(NPO法人カタリバ)

カタリバが関わっているご家庭でいうと、親御さんとそのご本人の意向が違っているというのはあまりないですけれども、ただ、親御さんが、お子さんの希望や生活の過ごし方に対してやきもきしたりとか、やはり定時制高校やチャレンジスクールに行くというのをなかなか、親御さんも後押ししてくださるケースと、そうではばいケースというのもあるので、そのあたりで利用停止というか、退会みたいな形にはならないものの、ちょっとそこでトラブルになりそうなケースというのは、例年、散見されるなと思います。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

それでは次ですけれども、実際にお子様

たちを受け入れて様々な支援をされているわけですが、このあたり、それぞれこういう視点や考えを持ってという理念というのをお持ちだと思うんですけども、例えば、キッズドアさんはどうでしょうか。実際に子どもが来られます。恐らく、不登校も含めてですが、学校でうまくいかなかった子であったり、自信がない子、自己肯定感の低い子、たくさんいると思うんですけども、これを実際支援するに当たって気をつけているところというのはあるのか。あとは、ジェンダーの視点とか、男性と女性で何か例えば違うとか、このあたりどうでしょう、実際に子どもたちを見ていて。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。やはり入ってきた段階ですと、意欲があまりなかったりだとか、自己肯定感がすごく低いなどというような子ども多く入ってくるんですけども、そういった子たちにまずは寄り添って、どんなことを考えているのかなとか、なかなか学校で先生だったり、保護者の方というと、上の立場というか、子どもたちと対等ではないような立場の大人と関わることが多いと思うんですけども、そうではなく、すごくフラットな関係で関わられるような、年代の近い大学生のスタッフだったり、同年代とまではいなくても、年上のスタッフであっても、斜めの関係といいますか、フラットに関わられるような大人といろいろお話をしてもらって、少しずつ他者とコミュニケーションを取ったり、ほかの人を信頼して話してみようかなと思ってもらえるような、まずは関係性づくりというところをすごく大事にしています。

(石阪委員長)

いわゆる学校でいうところの先生と生徒という関係ではないわけですね。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。私たちはもう先生ではないよというふうに、もう入ってくる……

(石阪委員長)

今、斜めの関係と言いましたけれども、横ではなくて、ちょっと斜めになるみたいな。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。本当に友達というほどフラットでもなく、ちょうどロールモデルになるような大学生だったりとか、何か相談事があつたら少しアドバイスはしてもらえよというような話しやすい近所の人というか、そういった意識で子どもたちには関わるようにしています。

(石阪委員長)

あと1点、例えば、将来ですけども、どういう支援をされているのか。例えば、ここにずっといていいよという支援なのか、それとも、ここを出て、こういうステップに次は行きなさいという中間的な支援をされているのか、これはどっちなんですか。

(NPO法人キッズドア)

それに関しては、やはり卒業というものも、不登校支援のほうですと中学校で利用も終了になりますし、居場所を兼ねた学習支援につきましても、その後というところが子どもたちはありますので、やはり今うちに来ている段階の先を見据えた支援というところは大事にしまして、先ほども事業説明でもさせていただいたように、子どもたちの自立を一番大きな目標としていて、それは精神的な自立だったり、あとは金銭的な、経済的な自立だったり、あとは社会的な自立と、いろんな面での自立があると思うんですけども、それぞれの自立というところを大事にして支援をしております。

ますので、確かに、卒業した後、特に不登校支援のほうですと、中学校を卒業して、進路が決まって高校に行っても、ずっと長い間、不登校で、学校という集団生活に慣れていなかったりすると、高校で、よし、頑張ろうと思って入っても、最初はすごく緊張していたり、うまくいかないこともあって、たまに顔を見せに来てくれたりすることはあるので、絶対戻ってきちゃ駄目だよというふうにはもちろん言っていないで、何か困ったことがあったらたまに顔を見せていいよというふうには声をかけてはいるんですけども、基本的にはその先のところで。

(石阪委員長)

見据えてということですね。

(NPO法人キッズドア)

はい。うまくやっていけるようにというところで、コミュニケーション能力の形成や、そのほかの自立というところの支援はしているところです。

(石阪委員長)

あと1点だけ、最後に伺いたいのは、どこまで踏み込むかということなんですけれども、そういう家庭環境というのは、例えば親と子の問題であったりとか、それから親御さんが実はこういう悩みを抱えているというところまで踏み込んで支援をしていくのか、それとも、そういうところはあまり入らずに、比較的、学習であったりとか生活の支援でとどまるのか、このあたりの踏み込み具合はどうなんでしょうか。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。保護者の方との関わりといったところでしょうか。

(石阪委員長)

どこまで踏み込んでいくのか。例えば、家庭環境であったりとか、そもそもこうい

った貧困が発生するのはこういった原因なんじゃないかと思って、面談を保護者とするとかね。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。もしそういったご家庭に何か問題があるんじゃないかとか、何か子どもたちから話を聞いたという場合には、まずは担当課だったり関係者というところのそういう場、まずは共有をして、一緒にどのように担当課や関係者でやっていくかという分担は協議するようにしております、すぐに私たちが動いていくというよりは、協議しながらやりつつ、私たち、フードパントリーを先ほどもやっていると伝えたんですけども、月に1回ご家庭に食料品を配布しております、その際には来てくださるんです。保護者の方が直接うちの居場所に来てくださるという機会が月に1回ありますので、その際に直接保護者の方と定期的にお話する機会がありますので。

(石阪委員長)

コミュニケーションは取るけれども、そこまでは踏み込まないということですね、だからね。

(NPO法人キッズドア)

面談というほど……

(石阪委員長)

大げさなものではない。

(NPO法人キッズドア)

ふだんの話のような流れで、最近どうですかとか、最近このような様子と聞いているんですけども、ご自宅ではどうですかというような形で聞いていって、もし話が出てきたら広げていくというような感じですよ。

(石阪委員長)

分かりました。ありがとうございます。カタリバさんのほうにも伺いたいんです

が、この問題、伺いたいんですけども、例えば、よく足立区では貧困の連鎖という問題があって、その環境がその子どもをそうしてしまう。またその子どもも同じような環境になってしまって、結果的には貧困が断ち切れないという問題があると。だから、対処療法的な支援の仕方というのもあるんですけども、ある程度まで踏み込むということも可能性としてはあり得ると思うんですが、カタリバさんはどうでしょうか、その辺のスタンスですけども。

(NPO法人カタリバ)

おおむねキッズドアさんと同じかなと思っておりまして、かなり難しい部分ではあります。

(石阪委員長)

難しいと思う、実際は。

(NPO法人カタリバ)

はい。我々の自己認識としては、あくまでその領域のプロではないという前提がありまして、進路指導とか進路決定においてはもちろん学校がありますし、生活の基盤を整えるという福祉的な意味では、専門職の方を含めた行政の方が前提にはいらっしゃるというところがあるので、そちらにいかにか接続をうまくやっていくかというのがベースの考え方で、そこに必要な対話といえますか、それは保護者の方も含めて、そういう後押し、アシストをするイメージなんですけれども、そういうところは我々の出るべき領域と思ってやっているケースが多いです。

(石阪委員長)

ということは、定期的に親と面談をしたりとか、親の悩み相談を受けたりということはあまり積極的にはされていないということかな。

(NPO法人カタリバ)

結論としてはそうです。

(石阪委員長)

そういうことですね。

(NPO法人カタリバ)

生活困窮の子どもたちと不登校の事業とどちらかを比較すると、どちらかというところ、不登校の事業のほうが親御さんとコミュニケーションを取るケースが多い。

(石阪委員長)

不登校のほうがむしろ多いんですね。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。面談みたいなものも含めて、年に一度は少なくとも面談、難しいご家庭は除いて、するようになっていて、頻度はご家庭によりますが、三者面談というよりは、保護者の方との面談というのをやることは多いですね。

(石阪委員長)

これはあくまで感覚的なものでいいんですけども、これはあくまで私の私見ですけども、例えば、不登校の昼間のお子さんと、それから夕方以降に来る貧困の支援の必要な方というのは、階層で見た場合、僕、不登校の場合のほうがバリエーションがあるんじゃないかと思うんですね。比較的裕福な方であったり、そういう子どもでも不登校になるケースというのは結構あるので、生活支援が必要な夕方の子と違うと思うんですけども、この辺、実感としてどうですか。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。ばらつきは、特に経済状況とかでいうと、不登校の子たちのほうが多いと思います。

(石阪委員長)

上から下までと言うのも変ですけども、ばらつきがある。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。ただ、もし一定の教育資金とかがある場合に、我々がやっている支援というのがかなり居場所という機能に寄ったものになっていて、プログラミングスキルを学べますとか、そういったものがあるわけじゃあまりないんですね。オプションという感じなので、やはりお金がある方だと、結構そういうフリースクールだったりとか……

(石阪委員長)

そういうフリースクールだったり、民間のそういったところを利用されるケースが多い。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

(NPO法人カタリバ)

あと、併用といいますか、そういったサービスとか塾みたいなものを使われている方というのも中にはいらっしゃいます。

(石阪委員長)

最後に、今度は実際にスタッフの若い方が、今のお話だと、大学生ぐらいの年代の方が中心になって支援しているということなんですけれども、彼らが実際この事業に関わろうと思ったきっかけであったり、採用のプロセスであったりとか、例えば、僕も大学生はたくさん見えていますけれども、この人は無理だなという学生が来るようなケースもあると思うんですがどうでしょうか。例えば、キッズドアさん、やってくる学生というのはどんな子たちが多いのかというところ。

(NPO法人キッズドア)

ホームページなどで募集をかけて採用していますが、やはり教育や心理のことを大学で学んでいる学生が興味を持って入って

きてくださることもかなり多いと思います。

あと、キッズドアで今増えているのは、キッズドアを卒業した卒業生が大学生になって、次は支援者として戻ってくるということがすごく増えておりまして、今、私のあるキッズドアの居場所においても、卒業生が数名、今度は支援者、スタッフとして戻ってきてくれているという形になっております。

(石阪委員長)

実際に来られて、例えば、気づきがあると思うんですけども、例えばですけども、もっとこうしたほうがいいのか、こうなって欲しいという学生、若い人たちからの要望というのは何かありますか。この事業に対してでもいいですし、あるいは彼らはアルバイトかボランティアかインターンシップか分かりませんが、ほぼ無給に近い形でやっているのか。

(NPO法人キッズドア)

いえ、うちは時給を。

(石阪委員長)

時給を払っている。

(NPO法人キッズドア)

はい。

(石阪委員長)

このあたり、待遇の問題とか、そういった要望とかというのはありますか。いかがでしょうか。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。待遇に関しては、やはり世の中の賃金上昇に合わせてられるほど潤沢な資金はないので、もしかすると、ちょっとやはり不満というか、気持ちとしてはもう少し上がって欲しいというものがあるかもしれないです。

ただ、賃金には代え難い魅力があるというふうに感じてくれる方がいて、やはり継

続年数というのは、一度入られたら、基本、大学卒業までいるんです。ということは、お金の代え難い魅力があったり、やはりここで子どもたちにこういうことをしていきたいんだという気持ちがあるからこそ、そうやって続けていただけるのかなというふうに思っています。

(石阪委員長)

ちなみにですけれども、スタッフの皆さんもそういった心意気でこちらに就職されたということなんでしょうか。どうなんでしょうか。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。もともとさいたま市のほうで僕も学習支援とかずっといろんなことをやってきたんですけれども、やはりもっと多く子どもたちに支援を届けたいという思いでキッズドアに入りました。

(石阪委員長)

次に今度伺いたいのは、恐らく、そういったスタッフの学生、若い方から要望とか相談があると思うんですけれども、何かそういう声というのは具体的にありますか。

(NPO法人カタリバ)

今回に合わせて、今、学生スタッフ、同じように時給制で働いてもらっているスタッフから聞いている話でいうと、我々団体に対してと、あと事業自体に対して、両方に係る部分だと思うんですけれども、不登校のほうも生活困窮世帯向けの事業も、どちらも居場所とか人間関係、社会性を育むというところに結構重きを置いておりますので、学習支援で、例えば、足立区でいうばたき塾という、高学力帯の子で、ただ、経済的には一定の水準よりも低いご家庭というところが対象になっているものが、もう少しその学力帯の低い子たちに対してもあったほうがいいんじゃないかという声が

あつたりとか、どうしてもワンストップで全部、食事も居場所も学習も提供しているよさは十二分にあるんですけども、もっと学習に特化した場所があれば、もしかすると、そっちに本当に頑張り抜けるような子も中にはいるんじゃないかというふうに考えると、そういうオプションといいますか、リソースが我々の中で人の人数であつたりとか施設のキャパシティの問題とかがあつたりするので、どうしてもそこに制約がかかってしまって、あまり、この事業を経験したからといって、必ず将来的に貧困状態とかひきこもりになるリスクが本当に下がっているというふうに言えないケースもやはり実際あるんじゃないかというのが、再生産を止める装置として機能できているかということ、ちょっと五分五分といいますか。

(石阪委員長)

やはりお金と人員の都合もあって、本来であればもう少しいろいろな支援ができる可能性もあるんですけども、それが今、現実的には難しいし、他とつなぐというところまでまだ行けていないというところもあるということですかね。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。やり切れていないところはあると思います。ある程度待つ形の支援にはなっていたりするので、プッシュ型でなかったりというのもありますし、もう少しできるところは、欲を言えばあるよねというのは、学生からも上がっている話であります。

(石阪委員長)

ちなみに、そういうところで働いている方というのは、地元の認知度というか、足立区の子が多いのか、それとも他から入ってくる人が多いのか、これはどうですか。

(NPO法人カタリバ)

カタリバは、足立区内の在住とか在学の方は非常に少なくて。

(石阪委員長)

ああ、そう。

(NPO法人カタリバ)

そうなんですよ。今のこの瞬間というところで区切ると、学生のインターン、時給制で働いている方は、大体20名前後、常にいる体制を取っているんですけども、その中でいうと、区内在住とか在学の学生は本当に二、三人ぐらいしかいない。

(石阪委員長)

10分の1ぐらい。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。10%ぐらいで、全くいない時期というのももちろんあったりはするので、文教大学さんとか未来大さんとか、授業の講座を受け持たせてもらって周知みたいなこともやっているんですけども、なかなか応募される方自体が少なかったりとか、一定の基準を設けて選考をやっていたりするので。

(石阪委員長)

そうすると、区としては、区内大学ともう少し2団体が連携して、例えば授業であったりとか、そういうことが進むといいんですが、同じ質問ですけども、いかがでしょうか。区内の大学生や区内のことをよく知っている学生は少ないのかどうかですけども。

(NPO法人キッズドア)

キッズドアに関しては、区内在住の学生が六、七割になるかなと思います。逆に多いかなと。

(石阪委員長)

これは何か秘訣はあるんでしょうか。

(NPO法人キッズドア)

恐らく立地的なところがあるのかなと思うんですけども、他の区からの交通の便だったりということで、足立区内で自転車で来てくれるスタッフがやはり多いです。

(石阪委員長)

応募してくる段階で、比較的、自転車で通えるエリアのところ。

(NPO法人キッズドア)

そうですね。絞られてきていて、応募してくれる子はやはり足立区在住という子がすごく多いなというのは、西部に関してはですけども。東部に関してはどうですか。

(NPO法人キッズドア)

東部のほうも同じく、足立区在住・在学が東部の場合は8割ですね。

(石阪委員長)

ああ、そんなに。東部は特に多いですね。そう考えると、やはり足立区の特殊性というのを恐らく感じている学生も多いと思うので、このあたり、足立区への理解というのをどうやって学生たちに持ってもらうかというのも今後課題だと思うんですが、本当に最後になりますけれども、これは聞いていいのか分かりませんが、資金繰りの方法とか、今後、例えば、これでやっていけるのかどうか。隣に区があるので言いづらい面もあると思うんですけども、あえて課題を挙げるとすると、どうでしょう、この事業自体は。これはもう私見で構いませんので。

(NPO法人キッズドア)

私見というか、一応委託費を中心にやらせてはいただいておりますが、様々な支援メニューであるとか、他にも運営資金が委託の資金だけで賄えているかというのと、否です。

(石阪委員長)

例えば、食材とかはどうされているのか。

(NPO法人キッズドア)

食材は購入しているんですけども、物価高騰が想定していたよりもやはり高いということもあって、今は各企業の方からご寄附いただいたり。

(石阪委員長)

寄附が多いですね。

(NPO法人キッズドア)

どうしても委託費だけで賄うということは現実的ではなく、少し持続性もないかなというふうに思っているの、企業の方をいろいろ巻き込みながら、人的な部分、そして資金面的な部分、そして様々な体験とか、そういったものも含めて、手を広げてやらせていただいているところです。

(石阪委員長)

恐らく委託の費用だけではなかなか難しいから、ある意味ではいろいろな企業とか人を巻き込むような。

これは、最後にカタリバさんもどうでしょう。やっぱり同じような感じでしょうか。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。委託でいただいているお金の中だけできっちり収めましょうというふうになると、今実施しているものよりは、もう少し頻度とかメニュー数とかもやはり下がることになってしまうと思うので、そのあたりは団体で別でファンドレイジングというのをやって、補填をしながらやっている。

(石阪委員長)

恐らくそうですね。

(石阪委員長)

2団体とも非常に大きな団体ですから、ほかの収益分をこちらに回すような、そういう形でされていらっしゃる。あとはほかとの連携ですかね。食材であったりとか、企業とね。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。食材の物的なご寄附をいただくということはもちろんありますので、民間の企業さんとかだと、そういった形で支援いただくというのもやっております。

(石阪委員長)

ありがとうございました。

私のほうからいろいろ質問させていただきましたけれども、なかなか厳しい質問もあったかもしれませんが、時間が少しありますので、皆さんから質問できればと思います。ここからは用意された質問ではありませんので、何かもしあれば、どうぞしょう。

では、水野さん。

(水野委員)

水野です。ありがとうございました。

不登校になった理由というのは、一人ひとりそれぞれだと思うんですけども、皆様から見て、主立った原因というのは何だと思われませんか。

あと、では、教育現場においてこういったことが解決できれば、もう少し不登校は減るのではないかというのが、私見で結構ですので、あれば教えていただければと思います。この2点。

(NPO法人カタリバ)

不登校にまずなる時期が少し早期化しているような印象がありまして、小学校時代から学校へ行き渋りがあったり、行けなかったというふうなお話を聞くケースが以前よりも増えているなというふうに思っています。それが小学校の中で何かが変わっているからというところなのかは私も把握し切れていないんですけども、やはり学校になじめなくなったときに、小学校の段階で、中学校へ入るときに大分環境が変わってしまうケースも多いと思うんですけど

も、学校の中で拾ってもらえるセーフティネットとつながりというのがなかなか維持されない状態が多いのかなと思っているので、もう少し学校の中で緩やかなつながりであったりというのが担保される取組とか仕組みが増えるといいんじゃないかなというふうに感じています。

体感で言うと、不登校になっている要因で、世の中の調査とかでも結構出ている無気力とか、そういったものが上位に来たりすると思うんですけども、何だかんだ言ってやはり人間関係で、それは対象が先生の場合もありますし、学校の友人のケースというのもあって、もともと熱意が将来にあって、絶対これをやりたいんだみたいなふうに思っている小さい子のほうがやはり少ないと思う、小・中学生になると。そうすると、普段の環境に対して生きづらさを感じ始めたときに、それを支えてもらえなくて、人間関係が主に発端になって行けなくなってしまうというケースが多いんじゃないかなというふうには感じています。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

1点、補足の質問だけですけれども、先ほどジェンダーのことを聞かなかったんですが、利用されている方というのは、男女比というのはそもそもどうなっていますか。国の調査によると、例えばひきこもりは圧倒的に男性の方が多いですけれども、子どもたちに関していうと7割ぐらい。実際利用されている方というのはどうでしょうか、何対何ぐらいというのは。

(NPO法人カタリバ)

これも年度によって違うんですけども。

(石阪委員長)

では、そんなに差はない。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。圧倒的に男子生徒が多くてということはないですね。ただ、比較的、6割ぐらい、やや男子生徒が多めかなというのは。

(石阪委員長)

気持ち多めかなという。

(NPO法人カタリバ)

はい。ただ、女子学生が多い学年とかもあつたり。

(石阪委員長)

では、その辺はあまり差はないと。

(NPO法人カタリバ)

母数が少ないので、そんなにばらつきが無いのかもしれない。

(石阪委員長)

これはどうですか、キッズドアさん。

(NPO法人キッズドア)

キッズドアとしても、やはり年度によってすごくばらばらにはなるところなんですけれども、やはりキッズドアも少し男子生徒のほうが、アクティブに毎日来てくれるとか、すごくたくさん回数を来てくれるという生徒が多いのは、どちらかというと男の子のほうが多いかなというふうには感じます。

(石阪委員長)

あと1点確認は、親御さんとの相談というときに、父親が出てくるケースというのがありますか。どうでしょう。例えば片親じゃなくて。

(NPO法人キッズドア)

ご家庭によっては、両親ともにそろっているんですけども、お父さんのほうが送り迎えしてくれるという場合もあります。

(石阪委員長)

来られるケース、プラスでいろいろやってくれる。

(NPO法人キッズドア)

はい。あります。

(石阪委員長)

ぬかがさん、どうぞ。

(ぬかが委員)

区議会議員のぬかがです。

4施設全部お邪魔したことがあるので、その節はお世話になりました。本当に良さはすごく分かっていて、大学生みたいなお兄さんが身近で接してくれているというのは、すごい他の施設には無い良さだなど、どちらも思っているんですけども、そういう中で、先ほど、例えば不登校でいうと、どちらの施設も年度途中で定員が20名いっぱいになるという状況だと伺いましたけれども、そうすると、お断りをどのくらいされているか、体感でいいんですけども、教えてください。

(NPO法人キッズドア)

キッズドアのほうで、西部地区に関しては、夏休み明けあたりでたくさん入ってきて、定員オーバーになることが多いので、その後は、基本的には区のほうで受入れを、順番待ちといたしますか。

(石阪委員長)

そうだね。区のほうが分かりやすいかな。

(NPO法人キッズドア)

担当課が違うので、別課になってしまうのであれなんですけれども、区のほうでストップになるので、何名ぐらいというのは確実には把握できないんですけども、現時点、その次年度で、もう3月の卒業が見えている段階で、次年度、体験したいですとか、見学待ちですという子が、今もう四、五名くらい、3名から4名ぐらいいるような形にはなりますので、恐らくいっぱいになってからは随時そのような形で、入りたいたけれども、入れないという子はいるのかなと思います。

(石阪委員長)

一定数、毎年発生しているということでですね。

要するに、空きがなければ追加できないわけ。

(NPO法人キッズドア)

基本的にはそうですね。

(石阪委員長)

そういうシステムなんですよ。

これはカタリバさんも一緒ですかね。空きがないと、結局入れられない。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。その仕組み自体は。

(石阪委員長)

毎年、そういった順番待ちみたいな方はいらっしゃる。

(NPO法人カタリバ)

年度にもよりますが、今、我々、梅島エリアと竹ノ塚エリアでやっているんですけども、竹ノ塚のほうもまだ若干。

(石阪委員長)

空き。

(NPO法人カタリバ)

はい。ありますし、梅島のほうはもう少し余裕があります。

(石阪委員長)

これはエリアによるんですかね、そうするとね。

(NPO法人カタリバ)

そうですね。あとは、中学3年生が多い学年だと、7、8人。

(石阪委員長)

それがごっそり抜けると。

(NPO法人カタリバ)

そうなんです。昨年度、7、8人ぐらいいて、卒業されて、その分が空いたままになって埋まらないということも年度によってはあります。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

では最後、質問を内藤さんから。

(内藤副委員長)

ありがとうございました。労働政策研究・研修機構の内藤と申します。ありがとうございます。

先ほどカタリバさんのほうからも、うちの行った、多分、子育て世帯全国調査かなと思うのですが、それではやはり世帯年収と不登校の関係性とか、きょうだいがいる場合、多子世帯、さっきお話がありましたけれども、それからきょうだいがいる場合も男女であると子育ての仕方が変わったり、費用がいろいろ、服とか、いろんなことが重なるということで、その因果関係があるんじゃないかということが言われたりしていると思うんですけれども、不登校はそれで。

それから、キッズドアさんがやられている放課後のほうは、生活困窮世帯対象というふうに書いてあるので、やはり私たち、男女共同参画の委員会なんですけれども、性別に関する差別とか格差とか、そういうのをどうやって解消していくかということをやっているんで、ご存じのように、女性が著しく低賃金、そしてひとり親の場合は非正規雇用が多くて、より低賃金になっているということが非常に皆さんの現場でも起きている。多く見えていると思います。もちろんその家庭自体の低賃金の問題があるんですけれども、お子さんはその家庭を見ているので、どうやって自分たち、特に女性、女の子に対して、同じモデルじゃないモデルを歩むために、さっきロールモデルの話が出ましたけれども、これはいろいろ事業が書かれていますけれども、もっと多様な人生があるということを示すために、

ジェンダー教育みたいのをどのように入れているか教えていただきたいということと、親に向けての啓発みたいなこともあれば、教えていただければと思いました。ありがとうございます。

(石阪委員長)

どちらでも構いませんけれども、いかがでしょうか。

(NPO法人キッズドア)

私たちのほうではファミリーサポートという事業をやっております、日本全国の困窮子育て家庭、今は4,000名ですかね。登録いただいている事業があります。そちらのほうで、ご家庭の保護者の方に向けて、まずキャリアアップということで就労支援の事業をやっております。そこでいろいろな身につけたスキルを生かして転職される方もいらっしゃいます。

ジェンダー教育のお話もあつたんですけども、ジェンダー教育ですよと特段やっていることはありません。ただ、弊社では、女子中・高生向けにITのプログラミング教育をするというのをやっております、そちらのほうでメタバース空間上で自分のTシャツをデザインして、それでファッションショーをやって、それで売れたシャツの金額を自分が支援したいと思う団体に寄附すると、そういったところの流れまでやっているものもございます。

そちらも、IT人材に女性が少ないという社会課題に対して、そういうITを女子中・高生だけを対象に行う、ということをしています。

(石阪委員長)

恐らくそういうことではなく、この事業の中でということですね。キッズドアさんのプログラムとしてではなくて、足立区の今回の対象のお子さんたちにそういった何

かサポートをされているかということですが、別にしていないなら、していないでも全然構わないんですけれども。

(NPO法人キッズドア)

特段事業の中ではしていませんが、体験活動などで多様なロールモデルをやってというふうな形を取っています。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

それでは、ちょっと時間が大幅に超過してしまいました。恐らく質問もあるかもしれませんが、本日はこれにてヒアリングのほうは終了させていただきます。

すみません。本当にお忙しい中、いろいろな質問に答えていただきました。どうもありがとうございました。

それでは、1部のほうはこれで終了とさせていただきますので、ご協力いただいたゲストの方はこれでご退席ということになります。改めて、皆さん、御礼申し上げます。本当にどうもありがとうございました。

(休憩)

3 令和6年度最終提言案について

施策11「困難を抱える世帯等が安心して生活できる環境づくり」

(石阪委員長)

なかなか限られた時間の中ですので、質問もちょっと限られた中ということになりましたけれども、一通り各団体のほうからお話をいただきました。

今回の場合は、これは何のためにこれを行っているかということ、最終提言、これを取りまとめるに当たって、足立区としてはもっとこういうところをしっかりとやりましょうとか、こういうところが欠けているの

で、この部分については対策をしていこうと、こういうことになります。

というのも、先ほど言ったように、数値がやっぱり目標値からちょっと下がってきているということもあるわけで、やはり足立区としても、今のままではなくて、何かプラスアルファということも考えていかなきゃいけない。

先ほどちょっと後半のほうに、ほかのやはり連携であったり、自分たちのメニューだけだとなかなか厳しいと。もっとほかの団体と連携をすとか、あるいは新たなメニューで子どもの将来に向けた何か支援ができるということが本当はできればいいんだけど、物理的になかなか難しいというお話もありました。

それから、ジェンダーの問題についてはなかなか難しい。特に、僕はもっと男性と女性に差があると思ったんですけども、その辺はあまりないというお話でしたし、ひとり親という点でいうと、僕は全く父親は参画していないのかと思ったら、そうでもなさそうな話だったので、その点、例えば、親御さんも、今の時代ですから、父親、母親関係なく、子どもの支援というのに関わっているというのは何となく分かったことが、一つ、僕の中では大きな点だったんですが、ちょっと皆さんからご意見やご感想をいただきたいと思います。

今度は、質問というよりは、感想、ご意見ですかね。あるいは提言を作成するに当たって、こういったことは絶対足立区としてはやっておいたほうが良いという、そこまで踏み込んで、どうでしょう。

杉本さん、何かありますか。

(杉本委員)

ちょっと今日、実は来ていただいたキッズドアもカタリバも、僕も拠点を見に行っ

たことがあって、特にキッズドアのほうは子どもの頃からお世話になった塾の先生がボランティアでお手伝いしていたりとかするので、結構見に行っていたりはしていた。議員になる前も見に行っていたことはあるんですけども、今回の提言案が「困難を抱える世帯等が安心して生活できる環境づくり」というテーマで、なおかつ男女共同参画という視点から見た場合。今日聞いたら、この支援に参加している子どもの話を主に聞いていると思うんですけども、多分、男女共同参画という視点から見たら、この困難を抱える世帯等というのは、どちらかという、子どもを育てるに当たって苦労している親御さんのほうのために何かプラスになる施策を区としては我々が提言すべきなんじゃないかなというのが……

(石阪委員長)

子どもが中心ですけどもね。親を支援して、それが子どもにうまく伝わらなかつたら問題で、子どもがやっぱり自立する支援で。

(杉本委員)

そうなんですけれども、その子どもの支援の話をして今日は聞きましたけれども、子どもの今日の話になるとなかなか、この男女共同参画というストライクゾーンがあったとき、結構、ストライクゾーンぎりぎりを攻めている話だと今日思ったんですね。

それで、ただ、この子どもたちに対する支援の内容を聞き取って、実際どうなんだというのも今日ヒアリング、皆さん、どういう支援かをまずご存じいただいたほうがいいと思うので、今日の話は意味はあると思うんですけども、ただ、この委員会の本来の趣旨として、その結果、では、今、石阪先生がおっしゃっていたように、結構、不登校もそうだし、居場所でも、お父さん

のひとり親で、お父さん、どちらかという、さっき言ったように、よくひとり親というと、内藤先生もおっしゃっていましたが、女性のみひとり親で賃金的に厳しい。それで預けるというパターンももちろんあります。一般的なイメージはそれなんですけれども、お父さんでバリバリ働いて、収入はそこそこ多いんですけども、それであるがゆえに忙しいから、お願いして助けてくださいというパターンもあるんですね。

ただ、金額によってはこの足立区の貧困のほうに当てはまらない子もいるので、そこら辺、救わなきゃいけないというのは別問題でちょっとあるんですけども、ただ、そういった意味で、今日話を聞いた上で、今言ったように、何というんだろう。今言ったように、いわゆる非正規職で低賃金でという、いわゆるそのイメージしているところの人たちのジェンダー的な面であれば、それは男女は分かりません。男性でそのパターンだっているわけですから、そこをどうボトムアップしていくかという感じの話なのかなというのはもともとイメージしていたんですけども、今日は、どちらかという、彼らにその話を聞いても、多分、そこら辺とはあまりリンクしていない団体なのかなというちょっと印象は持ちました。

(石阪委員長)

僕は、どちらかという、ちょっと視点が違って、足立区としてどちらを目指すのか。例えば、2つパターンがあるんですね。

1つは、今の親御さんがもっと子育てに対して真剣に踏み込めと。忙しいのは分かるけれども、もっと子どもと向き合って、ひとり親だろうが、所得が低かろうが、と

にかく子どもが第一なんだから、親が中心にという考え方。つまり、これは非常に日本的なんですよね。子育ての仕方、親がもうとにかく責任を持って、親が主観、中心になると。

ところが、一方で、今の時代は、どちらかという、親の負担というのはもう本当に大変なんです。子どもも育てなきゃいけない、仕事もしなきゃいけない、こういった厳しい状況の中で、もっと周りが支えるような仕掛けや仕組みというのはあってもいいんじゃないかと。むしろ親から子育てを開放してあげるような、そういった支援というのを一方で考えることによって、親の負担も軽減されて、例えばひとり親であれば、働くということに専念できると。子育てのかなりの部分を、例えば行政とか民間の方が手伝ってくれば、すごく生きやすくなる。

だから、ひとり親の家庭に、もっとやっぱり子どもに向き合うべきなのか、あるいはもっと周りと一緒に子育てをするような仕組みをつくるのか、これというのは結構スタンスやベクトルの大きな違いだと思っていて、何か日本というのはどうしても母親、特に母親に子育てを強要し過ぎるようなところが今まであったんじゃないかと。ちょっとでも子どもにひどいことをしようとする、親が悪いと。親の責任だ。

これは、今の時代、子どもが結婚もしなくなり、子育てもしなくなっている若者を見ると、やっぱり子育てというのは大変なんだ、つらいんだ。こういうことをある意味では再生産させるような仕組みが今の少子化にもつながっていて、何か親になるということがあまり楽しくないんじゃないかなと、今の時代というのは。足立区というのはそれでいいのかなというふうに思うん

です。

だから、そうなってみると、何か親から子どもを開放してあげるような、あるいはほかが支援してあげるような、そういう仕組みというのはやっぱり必要で、彼らはその役割を担っていたわけですよ、ある意味では。だから、そういったところをもっと彼らが、例えば、こういうことをしてほしい、そうすれば子どもがもっとちゃんと育つんだみたいなことを今日は言っていたのだと思っているので、やっぱり子どもというのを考えたときに、子どもの成長というのを第一に考えたときに、親だけじゃないよという、第3の場所、サードスペースみたいなものがあって、その役割というのは僕は非常に大きくなっていて、今、学校と親がちょっと大変過ぎませんか、ちょっとね。何でもそこに押しつけてしまう。だからもう先生になる人の数もどんどん減っていく。親になる数もどんどん減っていく。その負担をどうシェアするか。そうすると、それぞれの生き方の可能性というのが、また別の可能性というのが出てくるんじゃないかなと思ったんですが、秋山さん、どう思いますか。

(秋山委員)

私も石阪先生と同じ意見で、何歳であっても、収入が幾らであっても、安心して産み育てられる社会を目指すというのがやっぱりベストだと思うんです。だから、やっぱり子育ても社会が負担していく社会、それが理想かなと思っています。

さっき、不登校のお子さんを預かっている団体の話を聞いたんですけど、私は逆に、その不登校のお子さんを持っている親御さんの集まり、トーキョーコーヒーという団体にちょっと知り合いがいて、その団体のコンセプトが、親自体が、何という

か、不登校を受け入れる。親の考えを変えようという団体なんです。なので、その方々の考えとかを聞いてみるのも一つなのかなと思ったりもします。

(石阪委員長)

では、片野さん。

(片野委員)

今日話を聞いて感じたのは、家庭環境を改善するというより、子どもたちに生きる力をつけようというのが目的ではないかと。

(石阪委員長)

親や学校に代わってというところもあるのかな。

(片野委員)

だから、社会的自立がどうのという言葉が事業者から出ていたと思うのです。親への要するにアプローチはあまりしていないというのは、子どもたちがどんな家庭状況で、困難を抱えていようが、きちんと自立した人にしていって、貧困の連鎖を断つということが基にあると感じました。

では、これを指標で私たちが何を見るのかということになると、やはり安心して育てている、これは下がっていますよね。一生懸命やっているにもかかわらず、下がっている。ではここは何があるのと、気になるわけです。かなり長く受託していて事業者ですけど、この下がった2年間に何をしたのかということとは触れられませんでした。しかし、子育てというのはどの世帯でも大変なことなので、ここに任せておけば安心だと親が思っているかどうかということも一つあると思うんですよ。

(石阪委員長)

その仕組みはないですけどもね、今はね。

(片野委員)

今日あまり触れていなかったけれども、

今、本当に低年齢化が進んでいて、小学校1年生の不登校も珍しくない状況です。

(石阪委員長)

そうですね。

(片野委員)

だから、昔だったら考えられないし、最初は泣いていても、その後、学校へ行ったりとかするのに、今はもうそこから出れない。もうそのままずっと不登校になって、学校に来ない。

(石阪委員長)

不登校の数はもう激増していますから、今。どの世代もそうですけれども。

(片野委員)

はい。先ほどトーキョーコーヒーさんの話が出たけれども、学校に行かなくてもいいんじゃないかという発想に変えて、学校だけが学びの場、成長の場じゃないという考え方が出てきましたが、圧倒的にうちの子は学校にも行けなくなってしまったと嘆く親御さんも多いです。

(石阪委員長)

だから、恐らくこういった自治体も、学校と親に対する直接的な支援というのをやるんですよ。

(片野委員)

そうですね。

(石阪委員長)

そればかりやってきたので。でも、それで果たして成果は出ましたかという、これまでの。例えば足立区でもそうですけれども、日本でも。だから、子どもたちに何で直接支援ができないのかということところが一つ課題ということですよ。だから……。

どうぞ。

(ぬかが委員)

すみません。ちょっと思ったのは、この施策11の、直接関わりがあるのは短期的成

果指標の1ですよ。No.1ですよ。

(石阪委員長)

直接関わるのはそうですね。

(ぬかが委員)

このNo.1の学習支援というのは、恐らく不登校の学習支援のほうじゃなくて、居場所を兼ねた学習支援のほうですよ。そのときにこの割合がこうだというのが下がったというところなんだけれども、実は私、子ども計画のほうも審議会委員をやっている、そこでも共通して出されているのが、やっぱりさっきロールモデルという話があったけれども、ロールモデルが、親と学校現場と、この第3の居場所があったら、第3の居場所のお兄さん、お姉さんしかいないんですよ。

それで、子ども計画の中でも議論になったのが、例えば韓国ではハジャセンターというのがあって、いろんな職業やいろんなスキルを職業にするような支援策とか、そういうのがすごく進みつつあるんですけども、そんなふうに、ほら、何だっけ、子どもたちの職業体験の有料で払う、あれは何だっけ。ありますよね。

(秋山委員)

キッザニア。

(石阪委員長)

キッザニア。

(ぬかが委員)

そうそうそう。キッザニアまではいかないけれども、足立区でもいろんな職業やいろんな体験のイメージが子どもたちが持てるような機会がほしいみたいな意見が意外と多かったんですよ。そういった意味では、そこは今日の話と共通しているのかなと。

つまり、大人になったときの夢や目標があるというときに、自分の好きや得意はこんな職業があるんだよとかというのは1団

体ではちょっと限界があって、子ども計画づくりとも連動しながら、そういうロールモデルというか、イメージがつかめるような体験、そういうものを増やしていくというのはちょっと提言してもいいのかなと、今日聞いていて思いました。

(石阪委員長)

そういった意味では、課題としてありましたもんね。1団体だけではもうどうにもならない。やりたいことはいっぱいあるんだけれども。

(ぬかが委員)

そうそう。だから、そういうことは何か工夫して、あちこち行って頑張っているしやるけれども、やっぱりそこでは限界があるというかねと思いました。

(石阪委員長)

ほかはどうでしょう。委員の皆さん、ちょっとご意見を伺いたいと思うんですが、どうですか。内藤さんからいこうか、では。

(内藤副委員長)

いえ、ほかの人に聞いてから。

(石阪委員長)

ほか。では、ちょっと順にいきましょうか。

齋藤さん、どうですか。

(齋藤委員)

齋藤です。

今、ぬかが先生がおっしゃった、子どもたちが自分の将来や夢にどんなことが起きるのかな、どんな選択肢があるのかなという、そういう場所を見ることができるというのはすごく大事なことだと思うんですね。

キッザニアは本当に面白くて、子どもたちにも人気が高いと思うんですけども、やっぱりそれをもう少し、先生がおっしゃるように、あそこまでできないと思うので、やっぱりちょっと区の施策として何かそう

いったものが見せてあげられるような、そういうのが支援があったらすごくいいなと思います。昔でいうところの社会科見学のもうちょっと拡大版というか、何というのかしら。

(石阪委員長)

これはやっぱり学校の教育プログラムの中じゃなくて、それとは別にやったほうがいいという感じですね。

(齋藤委員)

そうですね。学校のプログラムでは無理があると思うんですよね。

(石阪委員長)

学校でありますよね、社会科見学とか職業体験というのは。

(齋藤委員)

なかなか難しいのかなと思うんですよね。なので、それが一つ区としてそういった事業、もしくは施策があればちょっと違うのかなというふうに、今、先生のお話を伺っていて感じました。

(依田部長)

よろしいですか。

(石阪委員長)

はい。

(依田部長)

足立区、指定管理者さんのほうが、おしごとらんどということで、去年、おとしぐらいからですか、始めていただいて、区内の企業さん等へお声がけして、自主事業としてやって、非常に評判がよかった。

学校側は、就業体験ということで、信用金庫さんですとかスーパーですとか介護施設ですとか病院ですとかに子どもたちを行かせるというのは今やっているわけですが、それとは別にギャラクシティの指定管理者さんのほうがやってくれていて、どうも、ギャラクシティ以外でもできない

かねという話はお問合せをいただいているみたいですので、学校の授業の一環じゃないところというのも少しできてくるのかなという、立ち上がったばかりの事業なので、我々も自主事業として見守っていくということで今のところ考えています。

(齋藤委員)

もうやっていたら。失礼しました。

(石阪委員長)

恐らく……

(ぬかが委員)

自主事業だからね。区の事業じゃまだないんだよね。

(依田部長)

あまり知らない方が多いので。

(石阪委員長)

この2団体も何かやっているはいるんですよ、いろんなところに連れていってみたいとか、職業体験をやっているんですけども、ただ、やっぱりマンパワーと予算の問題でなかなか難しいという話です。

(ぬかが委員)

でも、いいよね。ギャラクシティのおしごとらんどみたいな、そういう規模で、ミニキッズニアみたいな感じでね。

(齋藤委員)

そうですね。だから、もう一つ、学校優先だと、不登校の子というのはもうそれからはシャットアウトされてしまっているの

(石阪委員長)

そうなんですよ。だから、今までは学校に対してそういう様々な教育プログラムを用意するというのを行政はやってきたんですけども、これだけ不登校の子が増えてくると、学校に行けないわけですから、行かないわけですから。

(齋藤委員)

ですよね。

(依田部長)

もう一つ発言していいですか。

(石阪委員長)

どうぞ。

(依田部長)

ちょっと似て非なるものかもしれないですけれども、今、小学校5年生の子に、全員、劇団四季に連れていっています。去年、おとしやっていて、去年、おとしは自分も現場へ、今年も現場へ行っていますけれども、不登校の子が来るんですよ、劇団四季を見に。

(石阪委員長)

これはどういう応募の仕方。学校で連れていくんじゃないかと。

(ぬかが委員)

全員。

(依田部長)

全員連れていくんです。

(石阪委員長)

あれは東京都の事業でしたか。足立区の。

(依田部長)

足立区的全額自費ですけれども、各学校からバスを仕立てて、今年は4回に分けて、「美女と野獣」、舞浜アンフィシアターへ連れていくんですけれども、去年もおとしも、不登校の子なんだけれども、会場まで親御さんが連れてきてくれて見ていいですかと言われれば、喜んでというところで、正直なところ、チケットが高いので、なかなか見たことがないという方が多くいます。

不登校のお子さんの中でも、学校の子たちと往復は別だけれども、学校の子たちと一緒に交ざって見れますという子もいれば、いやいや、学校の子とは見れませんか……

(石阪委員長)

嫌だという方もいますもんね。

(依田部長)

ちょっと離れたところでとって、会場は広いので、ご用意して見ていただくということもやっていますけれども、やはり何かきっかけがあると出てくるという、自分としては非常にいいかなと思っております。

(石阪委員長)

ありがとうございます。またこれも情報提供ですね。いろいろ、だから、不登校の子であったり、学校に行けていない子への様々な支援というのは、これから始まっていくようなイメージですかね。

(依田部長)

もっと広がっていくと思います。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

では、まだご発言されていない方でいうと、新木さん、いきますか。どうでしょうか。

(新木委員)

少し話がずれますが、ギャラクシティの話が出ていたかなと思うんですけれども、実は12月にギャラクシティでクリスマスフェスというのを行っていただいた中で、我々、マザーズハローワークを宣伝のことで出店させていただきました。

その出展する前に見学させていただいたんですけれども、あのギャラクシティという施設がすごく、お子さんが生き生きして体験とかをなされていたのを見て、この施設をもう少しアピールできればいいのかなと個人的に思ったのと、足立区のエリアは結構広いので、別の場所にもこのような施設があればいいのかなと個人的に思いました。

(石阪委員長)

確かにギャラクシティの活用というのは一つ課題かもしれない。今言った不登校も

そうですし、生活困窮もそうですけれども、あまり統計は取っていないですよ、どんな方が利用しているかと。

(依田部長)

答弁すると厳しいところがありますけれども、ギャラクシティについては、ちょうど今年30年を迎えました。今年、来年、7、8と営業させていただいて、9、10、11は大規模改修の予定になっています。

あのクラスの規模のものを建てようと思うと、3桁億円になると思っています。では維持管理に幾らかかりますかとか、運営費は幾らかかりますかというところ、あれを区内でもう1個建てましょうみたいなのはあまり……

(石阪委員長)

そうですね。難しいでしょうね。

(依田部長)

難しいというような状況で、ギャラクシティについては、今、実は、足立区の区民の方とほぼ同じぐらい、区外の方が来ている形になっていまして、土日なんかは混雑し過ぎていて、混み過ぎているという苦情をいただいていますけれども、先ほど申し上げましたけれども、建てて維持管理して行って、人口が減っていく中においてどういった施設の管理運営をしていくのかというのは、慎重に考えざるを得ないかなと思っています。

(石阪委員長)

でも、考えようによっては、例えば平日の昼間とかは、比較的子どもたちのいない時間帯に、ああいう団体とかと連携して、例えば一緒に何か共同プログラムというのはできなくはないですね。土日ですよ、やっぱり混んでいるのは。夏休みとか。

(依田部長)

実は、カタリバさんだったか、どっちだ

か忘れちゃいましたけれども、例えばですけども、東京ヴェルディさんからチケットを頂いてJ1の試合を見に行くみたいな企画とか、バスケットのアルバルク東京だったと思う。サンロッカーズさんだか、どっちからチケットを頂いて見に行くとかというのを一緒に連れて行っていただいたりとかもたしかしていたと思うんですけども、土日じゃなくて、平日に不登校のお子さんのというお話があれば、それはもちろんご相談には応じさせていただきたいとは思っています。

(石阪委員長)

ちなみに、ギャラクシティの利用というのは、小学生、中学生までなんですか。その上は駄目なのか。

(依田部長)

貸館の部分で、例えば音楽室とかというところ、防音の設備があるので高校生とか大人の方もたくさん来ています。ネット遊具ですとか、そういったものが中心になって、ウォールクライミング——何というんです。たっけ。ボルダリングでしたっけ、今ブームの。

(石阪委員長)

ボルダリング。登るやつ。

(依田部長)

はい。ああいったものについては小学生までの方が多という形にはなっています。

あと、文化ホール、劇場がついていますので、そこは本当にいろんな方がご利用いただいている。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

それでは、秋山さん。

(秋山委員)

私からちょっと新木さんにご質問があって、私、こういう不登校のお子さんとかの

ケアをするのというのは、最終的には、要は、働いたり、ほかの人とコミュニケーションを取ったりして、自立できる社会人になることだと思っているので、ハローワークの求人とかというのは、最終学歴とか、そういうのというのはどんなものが多いのか。中卒でも全然オーケーというのが多いのか、それともやっぱり高卒とかが多いのか。

結局は、私、実は大学を中退しているんですよ。就職氷河期だったので、もうそれだけで、もう私はどんな企業にもエントリーする資格がなくなったと思って、自尊心がすごい下がった時期があったりしました。多分、学校へ行けていない子も、自分はまともに中学校も行けていないというのがすごい引っかけちゃって、就職というのはエントリーシートを出すことすらできないんじゃないかと思っていて、ただ一方、社会に出てみると、全く学歴なんて関係ないという仕事は山ほどあって。なので、結局、ハローワークさんではどういう求人の最低学歴とかが多いのかなというのをちょっと知りたいと思っています。

(新木委員)

ちょっと統計的には取っていないんですけども、様々で、もう学歴不問でいいですよとか、中卒という表現はあまりないんですけども……

(石阪委員長)

不問という書き方ですね。学歴問わないというのは結構あります。

(新木委員)

あとは高卒以上、大学以上とかという表現はありますけれども、年齢を重ねるにつれてあまり学歴というのは確かに関係がなくて、どちらかという、その仕事をする上での経験のほうが逆にあった方が、より

就職につながると思います。

(石阪委員長)

今は、逆に言うと、どういう制限が。年齢制限というのはやっぱりあるか。

(新木委員)

年齢制限は基本的にできない形になっていきます。

(石阪委員長)

できないですよ。それから、今はもう男女もできないですよ。

(新木委員)

できませんね。

(石阪委員長)

だから、恐らくそういった流れにはなっているんですけども。ただ、実際採用されないとかいうケースは多分あるということですね。年齢関係ないと言いながら、行ってみたら駄目とか、男女と書いていないから女性でもいけるのかと思ったら駄目ということは、多分現実的にはあるんだろうなという。だけれども、表向きなそういう制限というのはなくなってきてはいる。

(新木委員)

そうですね。

(秋山委員)

私は思うんですけども、足立区のこういう何か不登校のお子さんの施設とかを利用された子は、足立区内の企業にもう、何というか、もう無条件で採用するよみたいなルートが確保できていたらいいんじゃないかなと。

(石阪委員長)

何か修了書みたいなのは、聞かなかったけれども、あるのかな。何かこれを出ると。特にないか。

(依田部長)

ないと思いますね。

(石阪委員長)

居場所を出たからといって。

(依田部長)

逆に、隠すほう、隠すほうでやっている
ので。

(石阪委員長)

そっちか。だから、いわゆる……

(依田部長)

この事業に関しては。

(秋山委員)

何か西新井にある児童養護施設というの
かな、クリスマス・ヴィレッジさんなんか
では、千住にあるヤオシチというスーパー
さんにインターンで受け入れてバイトさせ
たりなんかして、働きがよかったらそのま
ま採用したりということをやっていますし、
そういうことを足立区でやって、だから足
立区で不登校になっても何かしら就職はで
きるよというルートが確保できれば、親も
安心だし、本人も一旦安心なんじゃないか
なと感じました。

(石阪委員長)

ありがとうございます。

(水野委員)

足立区で、もう本当に来てもらいたい人
材不足の企業、中小企業が本当に多いので、
そういったところにつないでいくのという
のは大事だなというふうに思いました。

施策11の「困難を抱える世帯等が安心して
生活できる環境づくり」、この「困難を
抱える世帯」というのは生活困窮者に限ら
ないのかなと思ったときに、そうしたら、
この1番の「学習支援に通う生徒のアンケ
ート」とあるんですけれども、学習支援は
所得制限を設けていますけれども、不登校
支援のほうは設けていないわけで、学習支
援のその場だけに限らないでいいのかなと
思ったんですけれども、これは定点調査と
いうことで学習支援でのアンケートに限ら

れちゃっているのかあれですけども、そ
ういうところもあるのかな。

「大人になったときの夢や目標がある」
というふうにあるんですけれども、それが
果たして「安心して生活できる環境づくり」
と合致しているのかなというのも思ったり
するんですよ。だから……

(石阪委員長)

指標自体を、これは8次の行動計画なの
で、途中で変えるということは難しいのか
もしれませんけれども。

(水野委員)

今の子どもたちは、本当に結婚したくないよ
とか、夢、目標がない子も別に不幸ではな
く、普通に生活している人でも多い子もい
るので、この1番が果たしてどうだったの
かなと、今さらですけども、ちょっと思
う部分もありました。

(石阪委員長)

指標の問題ですが、これはあくまで学習
支援に通うという方。

どうぞ。

(依田部長)

指標の見直しというか、追加みたいな形
で、次回調査のときとか計画をつくるとき
に追加するということはできなくはないと
思っています。今、今日というのは難しい
ですけども、次の計画づくりのときに。
ですから、9年の目標値がありますので、
その次、見直しとか、計画策定とか見直し
とかのアンケート項目や調査項目を足すと
いうのはありだとは思っています。

(水野委員)

例えば、はばたき塾とか、様々学習支援
とかもありますけれども……

(石阪委員長)

切り取り方が、これは生活困窮世帯をど
うやって切り取るかということで、今はこ

これは学習支援に通っているという切り取り方をしたわけですが、生活困窮者のデータというのはなかなかないですよ、子どもたちのデータがね。

(内藤副委員長)

でも、学習支援に通う子どもは生活困窮世帯の子どもなんですよ。

(石阪委員長)

そうです。だからこれを使っているということだと思えます。不登校のほうは入っていないということなんです。

(水野委員)

困難を抱える世帯というのが生活困窮だけに限られたら、生活保護世帯にターゲットを……

(内藤副委員長)

ただ、あれですよ。今回、施策の11、このタイトルとの関係で提言していくということなので、施策11の短期的成果指標No. 1の数値に限らなくてもいいんじゃないですか。

(石阪委員長)

もちろんそういうことです。これはあくまで一つの指標ですから。

(内藤副委員長)

今回、話を聞いたみたいに、不登校の話を混ぜて、両者に共通することとしてやっていくと。

(石阪委員長)

ただ、これを数値目標にするのはどうかということですね。

(内藤副委員長)

そうですね。これに限らない。これもあると思いますが。

(石阪委員長)

確かに、もう1点の視点としては、夢や目標がない人が果たして駄目なのかという議論にもなってくるので、持つほうがいい

というのは、これはある意味で大人の勝手な言い分なのかもしれないし。だから、このあたり、ちょっと指標を次の計画のときに見直す対象にしてもいいかもしれませんが、これについてはね。

どうぞ。

(齋藤委員)

齋藤です。

ちょっと話がずれてしまうかもしれないんですけども、さっき質問できなかったんですが、学習支援を受けていたり、そういった子たちは、学習だけでなく、例えば人とのコミュニケーション力、大人であり、同世代であり、そういった他者とのコミュニケーション力に対する支援というものをどこまで受けているのかなというのがちょっと気になりました。

やっぱり社会に出ていく自立力を身につけるに当たって、結構引かかるというか、つまりくのが、そのコミュニケーション力なのではないかなと思っているんですね。学歴がそんなになくても、コミュニケーション力があることでもすごくうまくいく場合もありますし、そういう意味で、コミュニケーション力というものがその不登校の子どもたちに対してどんなふうに支援されているのかなというのが一つ気になって、そこを知りたいなというふうに思っています。

(石阪委員長)

恐らく、でも今日のお話でも、一緒にご飯を作ったりとか、これはたしかそうですね。これを見ると、コミュニケーションを取るような場というのはかなり設けられている。いわゆる学習支援ではあるんですけども。

(ぬかが委員)

私も4か所見に行ったときに、まずコミュニケーションが取れるようにすることが

第1目標なんですと口をそろえておっしゃっていて、つまり、もう不登校じゃないほうの居場所でも、やっぱりコミュニケーションの力が劣っている子がすごく多くて、お兄さんと普通に会話をする。

だから、ゲームをするのもコミュニケーションなんですと、いわゆるカードゲーム的なものがたくさん置いてあるんですよ。遊ぼうよと言われて遊んで、トランプをやるのがコミュニケーションの力をつけるんですよとかとって、そういうことを居場所を兼ねた夕方からのやつでやっている話を結構聞いていたので、かなりあそこに通っている子に対しては、キッズドアさんもカタリバさんもそこは重視しているのかなと思いました。

(石阪委員長)

恐らく今の時代だと、本当は部屋から一歩も出なくても学校に通うことはできるんですよ、今バーチャルの中に教室があつてね。でも、あえてここに来るといふ人は、もうそれだけでもコミュニケーションを取れる僕は機会だと思っているので、まずは来て、最初は話さなくてもいいんだけど、一緒に徐々にね。ぬかが先生が見られたのは、多分、そういうのもいろいろ含めてやっているんですね、支援をね。

(ぬかが委員)

そうですね。

(石阪委員長)

いわゆる勉強だけ教えているというイメージじゃないですよ、あそこはね。

(ぬかが委員)

全然違う。本当に一緒に遊ぶから、何か放課後のほうでも貧困で、子どもの貧困で、あれは学校推薦で大体行くじゃないですか。行くんですよ。そうすると、やっぱりいろんなことから、社会の中から、また子ども

たちの集団からも切り離されている、そういう傾向の子も結構多くて、洋服が1週間同じよとか、1か月同じ靴なの、この子とはかと言われながら説明を受けていたんだけれども、そうすると本当にそういうコミュニケーションを取ることが大変で、そこからなんですという話を随分聞きました。

(石阪委員長)

そうですね。ですから、学習支援という形式ですけども、実質的にはいろんなことをされている。

(片野委員)

「学習支援」と書いているけれども、これは居場所ですよ。

(石阪委員長)

居場所。

(片野委員)

これは、学習支援と居場所、どっちだろうと思って、先ほど、居場所と言っていたでしょう。

(石阪委員長)

本来、これは居場所を兼ねた学習支援事業なんです。

(片野委員)

というのが正式名称で、これは学習支援という別のようなものを想像したりするのが一つと……

(石阪委員長)

だから、これでいうと、この前に「居場所」と入っていたほうがいいですね。「居場所を兼ねた学習支援」。

(片野委員)

入れたほうが良いと思います。この不登校、定義に入っていないでしたね。下の「くらしとしごとの相談センター」は、もう今、福祉まるごと相談課になっていますので変えたほうが良いように思いますが。

(石阪委員長)

これは次の計画のときね。

(片野委員)

この項目に関しては、項目自体を変えるのが難しければ、ちょっと指標の内容を分かりやすいように変えたほうが良いのではないのでしょうか？と。確かに生活困窮だけじゃなくて、困難を抱えたというと、例えば精神的な病気を持ったうちの子とかもいるわけですよね。世帯というと、いろんな困難があるから。

(石阪委員長)

困難をどこまで広く取るかということになってくるけれども。

(片野委員)

この「困難を抱える」が結構漠然としていて難しいですね。

(石阪委員長)

ちょっとこれはまた別の機会にしましょう。結構話が大きい。困難をどう、どこで切るかというのは結構難しいので。

(杉本委員)

ちょっといいですか。

(石阪委員長)

はい。お願いします。

(杉本委員)

この最終提言をしなきゃいけないじゃないですか、いずれにしても。この施策11のテーマでするときに、男女共同参画推進委員会として、男女であるとかジェンダーという視点からの提言の提言案のイメージが、今日の議論からだとちょっとイメージが湧かないところがあるんですけども、一例として、さっき、マザーズハローワークの話で、ひとり親家庭で苦労している人は女性のほうが圧倒的に多いんだとしたら、その就業支援をどうにかしなきゃいけないという視点もそうだし、多分、今日、彼らは、委託を受けているのは、こっちの男女

共同参画からではなくて、福祉方面から受けている人たちなので、例えばですけども、では、今回受けている子たちの自立支援という話が今日出ていましたけれども、その自立をするという話の中でよくありますけれども、今、足立区長がずっと言っている貧困の連鎖、何の連鎖、負のスパイラルから抜け出そうと言っている中で、よく言うのが、例えば生活保護世帯で生まれた子は、ああ、何だ、これでいいのかと。子どももそんなに、ああ、これで生活できるんだったら、自分も別に頑張らなくていいやみたいな感じになっちゃう家があるというような話も一部ある中で、例えば、何というんだらう、きっとお母さんが苦労している、ひとり親で苦労している、あるいはお父さんだとしても、例えば病気をして、大病して、復帰してから一人で育てなきゃいけないところで苦労しているというパターンもあると思うんですけども、何というんだらう、子どもたちが今言ったいわゆるジェンダー的な視点を持って自立していくという、今、多分、今日やっている支援のところではそういったところはあまりやっていませんという話なので、例えば、この委員会で提言をするんだとすれば、今、所管は違いますよ、やっているのは。この事業をカタリバとキッズドアにやってくださいという意味ではなくて、子どもたちの、そういう困難を抱えている家で育った子どもたちが、いわゆる自立して育っていく。

それは別に、結婚しようが、しまいが、別に関係なく、それはもう子どもたちの価値観だとして、ただ、その価値観を持ったそういう、子どもたちはそういうのを、こういう価値観もあるんだよというのをやっぱり教えてあげないと分からない部分があると思うので、そういった側面の子どもた

ちへの支援というのもやるべきじゃないかという提言をこの中に含めないと、今日の議論は、どちらかというと、ぬかが先生が入っているこどもの審議会のほうの議論に限りなく近い議論になっていたなと思うので、我々が男女共同参画推進委員として提言するのであれば、そういった側面を我々のオリジナリティーとして大分足さなきゃいけないんじゃないかなと思うんですね。

ただ、そのイメージが、今、僕の中で、すみません、想像と知識があまり多くないので、今、具体的に幾つかしか言えなかったんですけども、それを多分いろんな立場の人から、こういうふうにするべきじゃないかというのをもうちょっと議論して、この中に足したほうがいいんじゃないかなというふうに思うんです。

僕は今、一般的な話ししかできなかつたですよ。ひとり親のお母さんの支援だとか、子どもにその意識を持たせるための支援だとかというんだけど、どうでしょう。そうしないと、せっかくのこの委員会の存在意義というか、せっかく提言をするのに、子どもの審議会の提言と一緒にしちゃうんじゃないかというちょっと危惧を持っていますけれども、どうでしょう。

(石阪委員長)

これはどうでしょう。

(内藤副委員長)

私は賛成です。さっき、私も質問させていただいた点もその点だったと思うし、女性の場合は、女性のひとり親だと貧困みたいなね。でも、男性のほうは逆に、育児責任というのが社会的に性的な性別の役割になっていないがゆえの問題が起きているわけですね。

だから、逆に言うと、その子どもたちにもワーク・ライフ・バランスを保ちながら

子育てをするとか、そういう像を見せると。あるいは保育士になりたいとか、女性がマジョリティーの職種だってあり得るとか、そういう補正するような、ジェンダー観を補正するような、より——もちろん学校でもやられているんだけど、不登校や放課後事業の中でもきちんと、むしろそういうことを知らない、限定された世界で生きている子たちも多いので、それを知らせてあげるといようなやつを一つは入れたらどうかなど。

(杉本委員)

言いたいことをちゃんとやっていただきまして……

(石阪委員長)

基本的には、このテーマを少なくとも取り上げた時点で、ジェンダー色はそこまで強くないなと思っていたんです。今回の場合は、男女で分けるというよりは、子どもをどうやって、特に貧困世帯で子どもを抱えていらっしゃる方をどうやって支援していくのかと、そうなったときに何を入れるかですね。ジェンダーというのは今の親の問題ですよ、そうするとね。

(内藤副委員長)

今、だから指標11のところというのは、この柱立てを見ると「男女共同参画の視点における困難を抱える女性等への支援」の中に入っていて、その困難というのは……

(石阪委員長)

広く取ればそうですねけれども、今日、例えばカタリバとキッズドアというのは直接関係ないですよ。

(内藤副委員長)

でも経済的な困窮だけじゃなくて、生育環境全般にわたる複合的な課題。

(石阪委員長)

いや、違う。ジェンダーの問題には直接

触れていなかったですよねというのは、この2団体とも。

(内藤副委員長)

だから、触れていなかったというか、そのことが念頭になく事業を進めている点に問題があるんじゃないかという点で、杉本さんの指摘と私は関心が重なっています。

(石阪委員長)

だから、それを提言するということですね。

(内藤副委員長)

それは一つあるんじゃないかと。ほかにもあるかもしれません。

(杉本委員)

ただ、彼らにそれというのは、今回、そもそも受けている委託の内容のそういうメニューなので……

(石阪委員長)

そもそも委託の中にそういったものが入っているかどうかですね。

(杉本委員)

入っていないです。入っていない。

(石阪委員長)

入っていないと思う。

(内藤副委員長)

だから、委託する内容にそういうのを含めなきゃいけないということです。

(石阪委員長)

だから、そういう話ですよ、どちらかというと。

(内藤副委員長)

委託じゃなくてもいいですけども、とにかくそういう視点を持たないといけない、政策として。今はないわけですよ。

(石阪委員長)

僕の聞いた限りでは、基本的にはないですね。

(杉本委員)

オーダーしたほうがいいんじゃないかという提言。

(内藤副委員長)

オーダーするほう、オーダーする側の問題だと思うんですね。

(石阪委員長)

それはありかもしれない。

(ぬかが委員)

すみません。この施策11の提言ということであると、先ほど杉本さんは子ども審議会の議題になるだろうと言っていたけれども、実は子ども審議会の今の流れは子ども参画なので、子どもの貧困対策はもう10年前の話だみたいな議論も出ているわけですよ。それで、どっちかといったら、こどもまんなか社会で、どう子ども参画をするかというのが子ども計画のほうでは中心になってくる。

そうすると、やっぱり私も、今回、このテーマというのはジェンダー性が非常に低いなと思ってはいたんです。いたけれども、そういう中でやはり困難を抱える世帯が安心して生活できる環境づくりとして、こうこうこういった事業がますます重要だとか、もうちょっと拡充をととか、そういうこともぜひ言っていてほしいなど。

(石阪委員長)

私も、どっちかということ、それに近いスタンスなんですけれども。

(ぬかが委員)

何でそう言うかということ、あっちでは違う世界で議論がされるので、子ども計画では。やっぱりこの男女共同参画と考えたときに、困難を正面から視野に捉えて、そこは経済的な困難だけじゃなくというのはそのとおりでいいけれども、やっぱりそこにちゃんと対応しようよというところを重視する必要があるよねというのは一致してい

るんじゃないかと思うし。

(石阪委員長)

極端に言うと、学校とか家庭でも拾われない子どもたちというのは実はいて、子ども計画というのはそういうのはあまり線引きしていないですよ。子どもが中心だということだけを言っている。だから、そうじゃなくて、足立区にはそういう人もいます。それが再生産されて、また負の連鎖を生んでいるんだという、ここはやっぱり男女として触れておかなきゃいけないと。

(ぬかが委員)

サードプレイスがあることが、本当に子どもの幸福度とか、そういう点でも非常に大きいというのがデータで出ているので、やっぱりそういう点でも重要だということも含めて、ちょっとそこは明確にしてあげたほうがこれからも事業の拡充がしやすいんじゃないかと、あの事業としても思いました。

(内藤副委員長)

直接性別の、例えばロールモデル、この性別に対して別のロールモデルもあるよみたいなのを示すという、そういうことだけではなくて、そういうことではなくて、この「困難を抱える世帯等が安心して」ということなので、やはりひとり親だったり不登校を抱える世帯が困難を、それは大人ですよ。大人も入っているわけですよ。だから、そこに性別が絡んでいるんじゃないかということがここに置かれた理由でしょう。

(石阪委員長)

そうです、そうです。そういうことです。

(内藤副委員長)

だから、そこにリーチする。大人の問題、つまり、女性だったら貧困、非正規だったり、男性だったら育児を何でおまえがする

んだみたいな、そういう社会があるので、そこに本当は……

(石阪委員長)

広く考えればそうなんですけれども、今日の話の中になかったので、我々としては、ヒアリングを聞いて、それを基にやはり提言をするような形になるので、そうすると難しいなど。これはこれで大事なんですよ。内藤さんの言うことは、それはそれで必要なけれども、提言として書き込む際に、では、それはどこかから聞き取ったのかとか、そういうことになってくると難しくなる。

(杉本委員)

なので、今日、ヒアリングをした結果、そういう点が不十分であるから、こういうことをやるべきであるという提言でいいんじゃないですか。

ただ、彼らはそういうオーダーを区からは受けていないから、彼らの内容を批判するわけではないけれども、そこに今後、区としましては、あるいは別途、別の枠組みをつくるかしたらどうでしょうかという提言でもいいよ。

(石阪委員長)

結局、そうなります。区側の問題として、今後、例えば様々委託をするときに、そういった視点というのを必ず入れるべきだと。

(内藤副委員長)

いや、でも、委託先だから、委託されたことは基本的にやっていると思うんですよ。だから、委託された側に聞いている理由は、施策でオーダーしていない施策があるんじゃないかということを知りたいというのを聞くために呼んだんじゃないかだったですか。私はそういうふうには認識していました。だから、不備な点が、現場からこういうことがあったほうがいいという声も出ましたよね。やっぱりオーダ

一の不十分さがあるので、そこに対して一言言っていけるというのは。

(石阪委員長)

でも、それだと、2つ並べてはなかなかお互い言いづらいと。

(内藤副委員長)

それで私もそう言ったんです、前回。

(水野委員)

まず、来る学生たちでそういうLGBTの問題を抱えている子たちもいるかもしれないけれども、そういう子たちに対して何か指導するんじゃなくて、本当に普通に自然に関わっていく、周りもそういう関わっていくことで自然と教育になっていくのかなと思ったら、あえて、何だろう、学校みたいにLGBTのことを教えていくことが必要なのかなというのがちょっと疑問に思う。

(石阪委員長)

僕は逆に、委託業者にそこまで課すのは大変かなという。

(水野委員)

そうですね。また、学童とか放課後子どもとかもやっぱり地域の女性がやってくださっていることが多いので、そこまで教えられるかといったら、そこは難しいのかなとは。

(石阪委員長)

ちょっと一旦、この話はちょっとあれなので、ちょっとまだ3人発言がないので、佐藤さん、どうですか。

(佐藤委員)

皆さんと話がずれちゃうかもしれないですけども、私、子どもがいないので視点が違うんですけども、さっき、お話を聞いていた中で気になったのが、2つの団体さん、両方ともですけども、進学の問題はあまり触れていなかったんですね、進学

指導支援。

そこをやっていらっしやらないと言ったんですけども、例えば、障がい者の団体というのは、福祉施設とかNPO法人とかいろいろありますけれども、進学支援までやっています。ジョブコーチという存在がいて、就職の支援まで一緒に、会社へ行くまでを一緒にやってくれるんですけども、やっぱり今のお話を聞いていると、キッズドアさんとか、もう一人の方、カタリバさんのほうもそうですけれども、そこまでやってくれなさそうだと。

(内藤副委員長)

カタリバさんの資料に進路についてのサポートが書いてある。

(石阪委員長)

やっていますよ。

(佐藤委員)

ああ、そうですか。何か、そこがちょっと私、よく分からなくて、そこまでやってくれてという話だったのか、そうじゃないのか、ちょっと分からなかったです。

あともう一つ思ったのが、子どもの就職希望先というのはいっぱい今増えているじゃないですか、インフルエンサーとか。そういうのを見ると、何か今までの既存の就職先じゃないところを子どもたちは探しているかもしれない。そういったときに、そこへのアプローチ、サポートはどうしたらいいのか、実際やっているのか分からないですけども、どこかの施設へ行って見学する、足立区内の民間企業へ行って学ぶということだけじゃないものを求めているかもしれないので、その辺はちょっと調べてあげたほうがいいのかと思いました。

(石阪委員長)

田口さん、いかがですか。何か感想、意見、ご意見でも。

(田口委員)

意見ではなく、感想なんですけれども、1番の「大人になったときの夢や目標がある」と、さっき、こういう、この聞き方もどうかという話もあったんですけれども、これは最近、私が学校の開かれ協議会に参加して、自分の行っている学校の中だけの話なんですけれども、同じ質問を全学年、普通に通学している子どもに取ったアンケート結果を出していて、その結果が、1年生から6年生まで全学年ごとに出していたんですけれども、1年生はやっぱり80%以上あって、学年が上がるごとに本当に顕著にどんどん減って行って、6年生で60%台というものだったんですね。平均したら60より上がるんですけれども。

だから、この対象者の年齢とかを考えると、これは低いんですけれども、突出して何かすごく、みんなそうなんだ。この子どもたちも、普通に通学している子どもたちも、そんなに変わらないんじゃないかという感覚で……

(石阪委員長)

むしろ高いですよ、それが69あるというのは。

(田口委員)

そうですね。あと、大きくなるにつれて、この夢や目標があるかと聞かれたら、結構言いにくくなってくる。僕は何々になりたいんだとか、さっきも出ていましたけれども。

(石阪委員長)

なるほど。確かにそれは学年によってかなり変わってくるというね。

(田口委員)

そうですね。

(石阪委員長)

遠藤さん、いかがでしょうか。感想でも

構わないので、何か。

(遠藤委員)

申し訳ないんですけれども、私の年代とか仕事柄、今日のこの方はすごいことをやっているんだなという、偉いなというのが率直な感想なんですけれども、それに対してというのはなかなかちょっとコメントしづらいですね、正直なところ。

今、私にとっての一番の問題は、もう2025年問題。もう社員が、50過ぎの社員がぞろぞろいる。男性がほとんど。その人たちが80、90近いお母さん、もう認知がかかってきているお母さんと2人で暮らしていると、そういうのがぞろぞろいるんですね。もう何かケアワーカーと言うらしいんですけれども、この人たち、今はまだ会社に来れているけれども、本当に来れなくなったときにどうしようとか、それから、もう何でしょうね。女性も、車の部品の販売会社なので、99%男性なんですね。お客さんも大体男性の職場ですから、そこにぽつんと女性が入ってきているんですけれども、やっぱりそういうところで働いてくれる女性というのは、やっぱりどっちかといえば男勝り的なところで、何とか折れないで続いてほしいなと思うんですけれども、なかなかそこに男性社員が親切に教えようとしなれないみたいな、そういうところでのハラスメント的な問題ですとか、あとは、別の、同じ私の会社の中でパートの女性がやってもらう仕事もあるわけですね。八潮市なんですけれども、足立区とすぐ隣同士なんですけれども、そこでシングルマザーのお母さんが2人ぐらいいたのが、今、みんな辞めていきました。確かに小さいお子さんは病気になったり何だりと大変だと思うんですけれども、彼女の親たちと一緒に住んでいるので、それでも、1か月のうち、出勤が

もう4日、5日みたいになって、結局辞めていったんですね。辞めても大丈夫なのかなみたいな、生活的に思っちゃうんですけども、そんな仕事の仕方をしているというので、今募集しているんですけども、来ない。

(石阪委員長)

時間のほうも4時を過ぎましたので、ちょっとまとめさせていただくと、次回、最終的に提言をまとめるという流れになりますので、今日、ある程度、ちょっと方向性だけはここで共有しておきたいなと思いますが、1つは、先ほど言ったようにサードスペースという話もありましたが、学校や親への支援、これまでいろいろ様々な支援をされていましてけれども、不登校であったり、あるいは貧困世帯というのは、なかなか学校に通えない、行かないという子もいると。そういった中でこういう団体が活躍されていて、こういうところへの支援、むしろ子どもへの直接的な支援、これがやっぱり必要だということですね。

それによって、例えば、親だけではない、あるいは先生だけではなくて、第3の目が入ることによって子どもの健全な成長につながっていくと。そのための様々な支援というのが必要であると同時に、それはやっぱりここ単独では難しいので、様々な団体や企業も含めて連携することによって子どもたちを見守っていく、そういう足立区としての仕組みみたいなものを再構築しないと難しいですよという話ですね。これがまず1つかな。

それからもう一つは、先ほど言ったようにジェンダーの視点。特に、今後、例えば様々な企業に委託をする、あるいはお願いするときに、そういった視点をやっぱり持ってもらうと。支援をしてもらうのはすご

くありがたいことなだけけれども、その視点がどうもあまり入っていないということでしたから、これはもう別に事業者のせいではなくて、やっぱり区側の責任として、特にここの担当部局がしっかりと様々な今後委託をしていくとか、様々な支援を仰ぐときには、そういった視点を持って取り組んでもらうような、そういった指針やガイドラインみたいなもの、こういうものがあるともいいのかなということですね。

あとは、どうでしょう、皆さん、何か視点として。

はい。

(片野委員)

私は、居場所利用者のお母さん方と話すことがあるので、親御さんの悩みを区の相談窓口につないだことがあるのかどうか、すごく知りたかったんです、実は。

だから、そういうものを窓口で相談する。LGBTとか何か感じるものがあつたら、そういう親への支援もジェンダーの視点から行っていくというのを契約書に入れたらどうかと。自分たちが支援するんじゃないくて、支援をしているところにつないでいくということを入れていく。

(水野委員)

何かあつたら、つなぐ役割はやっているかと先ほどおっしゃっていた。

(片野委員)

それがどのぐらいの数値で出ているか分からなかったもので、結構な件数、本当は出ると思うんですよ、人数がいっぱいいるので。

(石阪委員長)

これは実際やっているか、やっていないかも含めて、ちょっとまだ分からないので、やっているというお話はありましたけれども、どうなのかね。

(片野委員)

実際どうなのかという。全国的にやっている話ししていたじゃないですか。ああいうのを区の中でもできたらいいと思います。

(石阪委員長)

では、これはちょっと一旦まだ持ち帰るような形にしましょうか。聞いてみましようか。

(内藤副委員長)

1点目、先生がおっしゃった1点目に関連するんですけども、やっぱり両団体とも委託費用だけでは賄えていないというのは重要だと思うんですよ。だから、経済的には足りていないですよ。だから、そこは言ったほうがいいんじゃないですか。

(石阪委員長)

区に対して。

(内藤副委員長)

そう。1点目の中で。いや、かなうかどうかはさておき、私たちとしては把握しましたよね、それは。

(石阪委員長)

それはそうですね。

(内藤副委員長)

だって、拡充しなきゃいけないということなんですよね、先生の1点目。

(片野委員)

だから、連携でいうと、拡充しろという話でしょう。

(石阪委員長)

僕はどちらかというと、予算を増やせという意味ではなくて、もっと様々な連携であったりとか、団体と、うまく企業とかの支援を仰いだりとか。

(内藤副委員長)

それでいうと、2点目も1点目と関連していて、ジェンダー、そのロールモデルを提供するのは、例えば、企業がキャリアの

やっている人たちを派遣して、それを話してもらおうとか。もちろん彼ら自身が教えるじゃないですよ。

(石阪委員長)

例えば委託団体がそういったことを言っているということは、我々、区長に言ってもいいんだけども、そうすべきだと、増やすべきだということまでは踏み込んでいいのかということですね。

(内藤副委員長)

踏み込んでよくない理由はどこですか。そういうふうな、みんな、そう思っているかどうかだと思いますけれども。

(石阪委員長)

増やすということは、どこかを削るわけですよ、簡単に言うとな。

(内藤副委員長)

でも、それ……

(ぬかが委員)

いや、削らなくても増やせる。

(石阪委員長)

そう。だから、それを言ってもいいけれども、どうなんだろう。

(片野委員)

積極的に連携すべきというふうに言う表現はどうでしょう。

(石阪委員長)

僕は、どちらかというと、そうですね。今、単独でやっていて、もういっぱいいっぱいなんですよね。

(杉本委員)

だから、彼らにそういう視点をもっといっぱい持ってくださいではなくて、彼らにもそういう考慮もしてほしいのと同時に、彼らにそれ以上のことをお願いするのは酷なので、今さっき言われたように、別途、こういう視点の今支援が足立区では足りないんだから、そういった政策を別途、やっ

ぱり新たに考えるべきじゃないですかと。

(石阪委員長)

どっちかという、そっちですね。施策で何とかそれを乗り切ると。今のようなやり方だと、いずれショートするということです、資金は。もう無理だと言っているわけですから、単独では。

(杉本委員)

今のカタリバとキッズドアにさらにこれをやれば厳しい話なのだという話ですね。

(石阪委員長)

もちろんそういうことです、だから。これは、だから事業だけが增えるわけですから、予算は増えずに。

(内藤副委員長)

そういうふうを受け取られないように注意したほうがいいかなと思います、負担が増えるような形で私たちは要望するわけじゃないので。ただ、そのときにやっぱり予算のことになっちゃうのかなと。

(ぬかが委員)

でも、副区長も言っていたんだけど、契約したときに、複数年契約だと、結局、今の人件費上昇とか物価上昇を見ていないんですよ。そういうところを委託事業をちゃんと見て増やさなきゃいけないんじゃないかという議論をしたときに、ついこの間も、一緒に総務委員会のときに、ついこの間も、いや、申出があれば増やすようにしていますとかと言うんですよ。

(石阪委員長)

どうなんだ。僕、あまり委員会でお金的なことを今まで提言したことというのは今まで一度もないんですけども、どうなんだろうと思って。

(ぬかが委員)

こだわらなくて。ただ、何というのかな、こちら側の責任を求めんじゃなくて、やっ

ぱりいろんなオーダーをするのであれば、いろんなオーダーや何かをするんだったら、それに伴うものもきちんとしようよねというふうにしないと、負担だけ増やす提言みたいにしちゃうといけないんじゃないかという気がする。

(杉本委員)

今の話で、多分、この民間の人たちもいる男女共同参画推進委員で学識の先生もいて、あくまで提案する組織なので、我々はお金の心配はしなくていいんです。我々の理想をどんどん伝えたほうがいいと思います。そのお金がどうだとかしがし行政と戦うのは、多分、議員であつたりとか、そこを説得するぬかが先生だつたりとか、そういうのはあれだけでも。

(石阪委員長)

いや、僕は、それと同時に、お金をたくさんあげろというのはある意味で安易な気がしていて、それは確かに大事なんですよ、お金というのは。だけれども、そのお金をあげる前に、何か仕組み自体を何とかもつと変えるような。

(杉本委員)

そうしたら、お金をあげるとい、お金をあげてほしいというリクエストじゃなくて、今言ったその仕組み自体を新たに枠組みを構築すべきだ。その結果、行政としてプラスでお金がかかるかもしれないけれども、その点に関しては……

(石阪委員長)

それは、我々、別に委員会として言うのではなくて、行政サイドがやればいい。

(杉本委員)

うん。お金に関しては。

(ぬかが委員)

確かに、オーダーとか、この委託の中でのメニューが増えていけば、当然積算はす

るから、そこまで言わなくても大丈夫かもしれない。

(内藤副委員長)

こちらが減らされないレベルで新しい施策が立つならば、それでいいです。

(石阪委員長)

いや、我々は、どっちかというところ、この団体に対して言っているのではなくて、区に対して言っているわけであって、あくまで、団体じゃないですよ。団体にこれをやれと言っているんじゃないで、区にやってくれということをするスタンスだと。

(水野委員)

「学習支援」とここに書いてありますけれども、やっぱり困難を抱える世帯の支援と考えると、学童であったり、フリースクールであったり、幼児保育であったり、様々な支援が必要なので、そういったところ、ひとり親の支援にもなりますしね。そういったところですよ、もしやる、拡充するとしたら。

(石阪委員長)

そのとおりです。だから、ここの団体というよりも、区のいろんな様なものがあるので、そちらに対して提言をします。

(杉本委員)

今やっていることが削られちゃうと、逆に困るんです。

(石阪委員長)

今の団体に対して言うのはちょっと。

國府田さん、何かもしあれば、どうでしょうか。

(國府田委員)

仕組みづくりのところは、皆さんのお話を聞いていて、そうなのかなと思いました。例えば、このカタリバさんがカタリバさんのことだけやって、ほかと全く連携しないとか、本当に単独だけでやっているとか

もったいない気はするんですよね。キッズドアさんはキッズドアさんだけでやる。だから、そこがうまく箱というか、いろんなところと、こういうメニューがありますよというのをまとめて提供できるようになれば、よりよいのかなと思います。

(石阪委員長)

団体もやりたいとは言っていたんですよ。そういうことができればいいということはおっしゃったので、そうなんですよ。これも、だから、できるといいですね、仕組みとしてね。

ちょっともう時間のほうがかなり超過しています。多分これは切りがないんですけども、次回、少しまた議論する時間が最後にありますので。ただ、ちょっとこれは、一応これから事務局にまとめていただくんですけども、僕もちょっと入って、幾つか、何本かにまとめさせていただいて、また次回、それをご提案いただいて、皆様から最終的なお話をいただくという形にしたいと思います。

4 事務連絡

(石阪委員長)

それでは、ちょっと時間が超過しましたがけれども、続いて、事項書の4番目、事務連絡ですが、いかがでしょうか。

(柏村主査)

多様性社会推進課の柏村です。

2点ございます。

まず1点目が、チラシを配付させていただきました。

3枚ございまして、まず、2月1日土曜日の「映画を読み解く。という楽しみ方」、そして2月22日土曜日の「ドラマ『虎に翼』から考える、女性と法律のはなし」、そして3月2日日曜日開催の「足立レインボー

映画祭」、こちらは全て募集中となっておりますので、ご参加を希望される方は事務局のほうにお声がけください。

そして、2点目、いつものお願いとなりますが、口座振替依頼書を皆様にお配りしておりますので、必要事項をご記入いただきまして、消せるボールペンなど、訂正が容易にできるものではなくて、通常のボールペンでご記入いただいて、会議終了後、事務局までお渡しく下さい。

以上です。

(石坂委員長)

それでは、次回ですけれども、次回は2月19日の水曜日。時間については一緒でよろしいですか。14時からということになります。お忙しい中、恐縮ですけれども、これが最後になりますので、ぜひご参集いただければと思います。

それでは、ちょっと時間が超過しましたけれども、以上で委員会のほうを終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。